

# 繫

T u - N a - G u



2 0 2 5 年 — 第 9 号 —

繫 第9号／目次

断片

解剖室

創作

家

涙いくつ

藤野  
繁

内角秀人

深井  
了

加賀金城魔界傳

前編

池田 良治

むらい はくどう

チヤツト

合評会案内

あとがき

# 解剖室

深井了

(二)



セメントの壁。長々とした廊下だつた。私はきびすに重みを感じながら、だらだらと下り坂になつている廊下を歩いていた。足の裏にセメントは堅い。厚手の表紙の本を二冊、手に持つていて。私はまっすぐを向いて歩いている。壁には何も貼つてなく、ただまだらになつた大きな模様が、濃く薄くしみを作つていて。

先は渡り廊下になつていた。壁は半分の高さになり、ふきさらしになつっていた。枠の木材はまったく茶色だつた。遠くに庭木があり、手前が砂利の多い道とも庭ともつかぬ地面になつていた。私は又、前を向いて歩

いた。廊下の先は真っ暗であつた。講義のある部屋は、その暗闇の中を左に曲がらねばならなかつた。

「S君。」

(二)

後から肩に触わられ、私はふり返つた。ふり返る

と、その暗闇の中に、高橋先生の顔が笑つていた。髪

の毛が両方の耳のあたりではね上がり乱れていた。頬

と唇の間に細い二本のしわができ、茶色の顔に厚い眼

鏡とその奥の鋭い眼が、私の眼をじっと見て光つてい  
た。

「久しぶりだね。授業出てきてるの。……また、来な

さいよ。」

又、少し笑つて、先生は先に行かれた。はね上がつ

た髪の毛だけが暗闇の奥に消えて行つた。私も講義の

ある部屋に急いだ。

セメントの壁。長々とした廊下だつた。

硬いセメントを感じて、足の裏は平らさを感じてい  
る。足に感じる冷たさと暗さは本当は想像である。そ  
の冷たさと暗さの中、私はまつすぐに歩いた。

左に曲がると両側に教室が茶色の防火扉を開け放し

てあつた。誰もいらず、茶色の机が列を作つて窓まで続  
く。そして、だんだん前の列が見え、教壇が見え、最  
後に黒板が見えた。

教室は一つしか続かなかつた。

だらだらと長い廊下が、少しづつ下に降りながら向こうの明るさまで続いていた。

壁は貼り紙もなく、ただ灰色の大きなしみだけが、

濃く薄く寒々とした模様で、いつまでも続いていた。

私はまっすぐ、遠くの明るさを見ながら歩いた。明るさは遠くばんやりとしていた。渡り廊下があり、外は

曇っているのだろう。

私は本を二冊持っていた。厚手の本で、両方とも古い緑色のがつしりした表紙がついていた。

「F君。」

渡り廊下の所で、後ろの暗闇の中から声をかけられ、枯れた堅い手で肩をたたかれた。

「最近どうしてゐるの。元気なの。」

振り返ると暗闇から声をかけ、肩に手をかけているのは高橋先生だつた。笑つていて、歯が出てて、口と頬の間に溝のような濃い短いしわが二本寄つていた。しわは他にも沢山あり、顔は茶色で眼鏡をかけた眼だけが鋭く私を見つめていた。それでも、顔は笑つていて、歯が白く出ていた。

「たまには、来なさいよ。」

と言つて、又、すたすたと廊下の先の暗闇に消えて行かれた。その暗闇の奥に左に曲がると講義の部屋がある。私はそこに行くのだ。高橋先生は最後に笑つていたが、その暗い闇の中をスタスタ消えて行かれた。

(三)

一本溝があり、ボチボチと小さな突起がいくつかあるだけだつた。

赤い心臓だけがピクピクやつていた。白い腸はいく  
ヶ所かで傷を持ちながら、だらだらと腹腔の中から解  
剖台の上に延びていた。解剖台の上には、黒くしみに  
なつた昔の皿の上に、二、三滴赤い血が落ちていた。  
はしには、白い毛を持つた切りとられた腸の上の皮が  
縮かんで転がつていた。

褐色の肝臓の一番端が赤く膨れ上がつていた。その  
膨れ上がつた先端は表皮が薄くなりピンク色をしてい  
た。脾臓には異状はみられなかつた。ただ、白色のく  
しやくしやした細長い臓器が横に延びているだけだつ  
た。中を切り開いてみたが、やはり外と同じ色で中に  
与えた。結局、つまみ出された煙草は、両側に指の後

ろの水分をしみ込ませた跡がついていた。

天井を向いて、煙草を喫んだ。造作のないはり天井は、ただ汚ならしいだけであつた。所々、黒くすすのついた蜘蛛の巣が垂れ下がつてゐる。ただ眼を引くのは、天井近くにつり下げられた棚の上のふくろうの眼

であつた。古いほこりをかぶつた剥製は、少しかたがつたまま、じつとあらぬ空間に眼を開いてゐる。その隣に雉子がいたがそれは壁の方を向いたまま、長い尻尾をこちらに向けてゐるだけだつた。その二つの獲物

のまわりには茶色くなつた資料が、又その上には本が

色々とボール箱の底から顔を出してゐた。私は大きく息を吸い、その棚の方に向けて煙を吐いたが、途中で勢いは坐折し、ふわふわと天井に向かつて上つてゐた。

な様子の都築があたりを見回しながら入つてきた。

机の上にはねずみが横を向いたまま、腹から腸を出して眠り、その横には白いレポート用紙がある。私は手を止めて、それ等を眺めていたが、遠くで、自分の遠くの方で、やらねばと考えた。

(四)

「いたいた。」

顔上げて入つて來たのは、うれしそうな顔をした梶原であつた。大きな眼を丸くこちらに向け、その眼を前に出すように入つて來た。後から、とまどつたよう

「来てたの。いつから出て来たの。それで、こんな所にいるとはねー。」

一人で嬉しそうな顔をして、私の上で話した。私はまだレポート用紙に顔を向けながら、丸い大きな彼の眼と、同時に、あのふくろうの眼を想像していた。

都築と梶原は、棚と向かい合わせの長椅子に坐り、

だろう。

私は自分の椅子に背を持たれ、実験机の上に両脚をのせていた。梶原達の椅子は低くて、背の高い梶原は少し背を丸め、二人共、まっすぐに自分の向かいの棚の方を向いていた。ただ梶原の眼だけが大きく濁つた光を出していた。彼らの坐っている所は、部屋の片隅で薄暗く、平生は大きいだけで鋭くない梶原の眼も、本当にふくろうの眼のように鋭く見える。

私達は少しだらだらと話しすぎたのかも知れない。

梶原がもうパイプを吸わないのも口の中にヤニが唾を吸いながら、いっぱい溜まつたのだ。部屋の中は彼の吸つた煙と、私の吸つた白い煙がいっぱい立ち込めていた。都築も疲れ加減に下をじっと見てている。棚のガラスの中よりも、こちらの足下の方が暗く落ち着くの

彼等は暗く見えた。この部屋の中で白いのは私の足だけで、それは疲労の中で弛緩していて、白く感じられるようだ。私の煙草も白かつたが、それは紙煙草が燃えるので、白く煙を出している。彼等はその遠くに、一人は前のガラス戸の中の暗い自分の顔を見ているよう大きな眼を開け、一人は時間が過ぎ去るのを待つ為だけに、下を俯いていた。もう誰も坐らなかつた。

「明石の所へ行こうか。」

私は書いてしまわなければならぬレポート用紙を見やりながら言つた。

「うん、でも、それ書かなくちやならないんだろ。」

「いや、今、書く気がないんだ。後から書くよ。」

「それじやあ。」

と言つて都築が先に立ち、ゆっくりと背中を見せた。

梶原も立ち、少し猫背の背中を見せた。彼等が出てから、私もドアに近づき出た。

都築はA定食の魚をつついていた。白い衣の下からこれも白いこぼれ易い肉が見えていた。その肉をフォークがつきさしている。皮がひらひらと黒い。都築は食べながら、眼鏡をこちらに向けている。そして、それは笑つているのだ。私は、ハンバーグをつついていた。中から変な匂いがし、外のケチャップはどうどろと黒い茶色だ。私の口の中には、その中から出て来たたまねぎの片があつた。

都築の眼鏡は厚く、こちらには白く反射して見える。

「明石はお屋から来るのかしら。」

「多分来るんじやない。来たらマージヤンでもしようか。」

(五)

「何かバイトやつてんだって。」

「うん、何か、あいつの部屋の動物の飼育らしいよ。」

「うん。」

「一日一回餌をやつて、それが千円になるそなうな。」

「まあ、わかんないね。就職する気はないけどね。」

「へえー。割と、いいじやない。」

「ふーん。」

都築は本当に笑っていた。顔がゆるみ、歯の間から舌が見えた。私はハンバーグの切れ端をフォークでさして口に持つていった。変な味がする。

「でも、そちらは学校出でくるの。」

「いや、だつてずっと休みだつたろう。」

「うん。」

「そちらは最近何やつてるの。」

「な。」

「なかつただけだよ。」

「やつぱりそちらほどでもないけどね。」

「ふーん、優雅でいいね。」

「いや、でも、一応やるだけはやらないとね。」

「試験は受けるの。」

「大学院の?」

今度は声を上げて笑いそうであつた。頬の下に生えたやわらかい髭が笑つている。ムニエルは残り少なになつてゐる。白い肉辺は、三つ残り、どれが一番大きいのかわからなかつた。本体と見られる黒い皮がひら

ひらとついてくるのは衣をはがされたかに見えた。フ  
オーラは、その横の衣だけが大きいのをつきさした。

ソースはかかっていなかつた。

「最近、こここの食事、まずいね。」

「うん、このハンバーグなんか食えないと。」

「いや、これなんかと無理して食つてんだよ。」

「質が悪いのは仕方がないとしても、味付けも悪いよ

ね。」

「材料がひどすぎるよね。」

「あんまり安くもないのにね。」

「最近の物価はどうなつてんの。」

「生活しにくいね。」

「それで、明石もバイト始めたのかな?」

「どうかな、何か買いたいものでもあるんじやない  
の。」

「今でも、麦飯を食つてるの?」

「らしいよ。意地みたいだね。」

「でも、すごいよね。」

「この前一緒に食つたけど、あんまりおいしくはなか  
つたよ。」

「でも、体にはいいと言うよ。」

「でも、まずいと思えば良い」ともないだろう。」

「あいつ、別にまずいなんて思つていらないんでしょ。」

「ああ、そうか。」

また、私達は笑つた。二人の食器にはまだ、御飯粒

や、キヤベツの切れくずや、ソースのシミが残つてい

たが、二人の手はとっくに止まっていた。私の手はまだ、フォークとナイフを持っていたが、最後に無理に食べたハンバーグはもう胸の中ほどにあつた。そして、やつぱり、いためた玉ねぎの切れ端の粒が、食道に感じられた。都築は味噌汁を半分位残していた。茶色の汁が丸い水平線を作っていた。

「行こうよ。」

今まで黙っていた梶原が急にこう言つた。こういつた彼の眼はやはりまつすぐに前を向いており、さつきうどんを箸でつかんでいた時とほぼ同じ顔をしていた。まったく同じ顔で、今もまだうどんをすするうとしているかのようである。実際どんぶりの中のおつゆの水平面はほとんど上下がついていなかつた。眼は黄緑色で顔にシワが出来ている。

# 家



内角秀人

私の生家は貸間だった。

両親が時計店を経営しており、その店舗と一緒に八畳一間を借りて住んでいた。店は私が生まれる前の六月十日に開店していた。私は三月一日に誕生したのであるが、しばらく店が忙しかったので、母方の実家に里子に出された。帝王切開で生まれ、母の乳の出も悪く、虚弱体質だった。半年経つて、両親のもとに戻された。五年後の七月二十一日、妹が生まれた。私の家は四人家族だった。

商売がなかなかうまくいかず、貧乏暮らしが続いたが、明るい家庭だった。私や妹が幼い頃は狭い八畳一間でも一家四人、十分暮らしていく。ちなみに、台所とトイレは共同で、風呂はなかつた。私たち家族が借りていたのはアパートの一階部分で、二階には他の居住者がいた。

私が小学生になると、両親は勉強机を買ってくれた。店舗と住居の間に板間に設置された。その机で私は勉強した。勉強机を買ってもらえなかつた妹は羨ましがつっていた。長男ということで、私は将来を期待されていた。だが、私は学年で一番遅い三月生まれということで、四月五月生まれの者とは一年近いハンデが

あり、小学校低学年の時は、学習面でも運動面でもか

なりの遅れを取っていた。また、小学一、二年生の頃

はしょっちゅう風邪を引き、学校を休みがちだった。

私と妹が物心つき、大きくなつてきて、今住んでい

る家では手狭になつてきた。これからますます成長することを考えると、もつと広い家に引っ越す必要があるた。

私たちがそれまで住んでいた貸間は町内の端っこにあつた。町内の中央には、トタン屋根の小汚い古ぼけた民家があつた。そこには老婆が一人で住んでいた。

私はその民家の道路を隔てた前にあるガレージで、よく町内の幼馴染みと柔らかい庭球を使って野球をしていた。狭いガレージだったもので、庭球はよく民家の屋根を越え、民家の庭先まで飛んで行つた。それを拾いに行く。

「こらつ、何勝手に人の家に入り込んでいるんだ」

老婆に見つかると、よく怒鳴られた。追いかかれたりもした。その時は、逃げた。おかげで、逃げ足が速くなつた。

私が小学五年生の時だ。いよいよ引っ越しなければならぬ必要性に迫られた。店の売り上げは順調とまではいかなかつたが、そこまで悪くもなかつた。店は

引き続き営業していく方針だつた。固定客も、少ないながらもついていた。

「お父さん、中松さんの家の後釜を狙つているらしいのよ」

母がこつそり私に耳打ちした。中松さんというのは老婆の名前である。老婆は一人暮らしに飽きたのか、自分の子供の住んでいる家に引っ越すという噂があつた。あの民家に引っ越すのか。店はどうするのだろう。子供ながら、いろいろと心を悩ませていた。

「でもね、中松さん、強欲で、なかなか安く譲ってくれないらしいのよ」

母はさらにこぼしていた。引っ越すには多額のお金も必要らしい。貧乏暮らしの私の家にそんなお金があるのだろうか。

「八月中に引っ越すことになった」

七月に入ったばかりの暑い日、父はそう宣言した。

懸案のお金は父の兄にあたる伯父が小学校の先生をしていて、借りる段取りをつけたという。これで狭い家から解放される。私と妹は大喜びだつた。特に妹は引っ越しの際、部屋と店の隅っこに小銭が落ちているのを見つけては、それを拾うと自分の物にできると知つて、大はしゃぎしていた。

新しい家は店舗兼住宅の一軒家だった。道路に面した店部分がコンクリートで建てられており、それに今まで建っていた木造の住宅部分がくつつく感じになつた。さらに奥には小さな庭がついていた。中二階のある八畳二間に台所がついた平屋建てであつた。ふすまのないあけっぴろげの家だつた。中二階が私の勉強部屋に充てられた。風呂は相変わらずなかつた。

この家で、私は高校三年生まで過ごした。真夏の暑い日など風呂のないことで、不自由さを感じていた。

私はこの家が嫌いだつた。剥き出しの梁。トタン屋根。ほこりがすぐに溜まる壁面。蜘蛛の巣が張つた天井。定期的に掃除をするも、拭いきれない。中二階なので、自分の部屋では満足に立てず、猫背になつていて。それで閉塞感を感じていた。梅雨時にはどこからともなくナメクジが出没し、軒下にスズメバチが巣を作りかけた時もあつた。ネズミが棲みついた時もあつた。古くて汚くて狭くて、友人を家に呼ぶことが恥ずかしくてできなかつた。移転して店を新装開店したが、客はほとんど来なかつた。

こんな家にいては駄目だと思いつ、一旗揚げようと、高校卒業後は東京の大学に進学することにした。だが、家には私を東京の私立大学に進学させる学費や生活費

がないように思われた。かといって、国公立を目指せるほど私の学力は高くなかった。店は私が高校二年生の時、一度不渡りを出していた。

どうにかなるだろう。甘い希望を抱いて、私は受験勉強に取り組んでいた。そして、何とか志望の大学には合格した。あとはお金が問題だつた。

時を同じくして、父が入院した。どこだかわからぬが、内臓の疾患という話だつた。幸い、命に別状はなく、大事には至らなかつた。

私は決心した。自分の道は自分で切り開こうと。

高校の担任教師から、新聞掲学生という存在を教えてもらった。朝夕新聞を配つて、学校に通うというわけである。中学高校と野球部に所属しており、私は体力には自信があつた。これでやつてみようと思つた。若き血がたぎつていていた。自ら、独立独歩の道を選んだ。東京での新聞掲学生としての住まいは新聞店の寮に入れてくれるという。私の前途は明るいように思えた。上京し、品川区西五反田の新聞店で働くことになつた。仕事は思ったよりきつかつた。朝夕三百五十件ほどの配達のほかに、集金、勧誘、チラシ入れの業務もこなさなければならなかつた。その合間を見て、大学へ行つた。大学の必修講義が夕方遅くの時間に割り当

てられていた時は、自主休講しなければならず、必然的にその科目的単位を落とすことになつた。学校に行くために働いているのに、講義を受けられない。それが納得できず、辛かつた。勤めて二週間で仕事が嫌になつた。

新聞店からあてがわれた寮というには、木造の四畳半一間のアパートの一室だつた。台所、トイレ共同、当然のように風呂無しだつた。月々部屋代一万五千円、共益費二千円だつた。最寄り駅は東急目蒲線の不動前駅。東京は富山より湿気が少ないが乾燥していて、気温が高いように感じた。夏など部屋にいられたものではなかつた。扇風機はあまり役に立たず、エアコンなど高価な冷房器具を買うお金がなかつた。仕事のない時は涼しい図書館や喫茶店に入り浸つた。

このままではいけない。このまま、ここにいてはいけない。心の中で、自分自身に言い聞かせていた。私は新聞店を辞めようと思った。ただ、はい、辞めます

といふわけにはいかなかつた。私は大学の入学金と一年分の学費を前借りしていた。それを返済しなければならない。それから節約を重ねて、借りていた奨学金と三年生の前期の学費の分のお金を貯めて、二年で新聞店を辞めた。大学を辞める気にはならなかつた。せ

つかく合格して、苦労して通学していたのだ。ここで辞めては今までの苦労が水の泡になると思つていた。大学を辞めたところで、自分に何ができるわけでもなく、このまま社会に放り出されても何一つ満足にできないと自覚していたこともあつた。

新聞店を辞めると同時に、寮も出なければならなかつた。住んでいたアパートの近くに、同じような四畳半の部屋を見つけた。アパートの二階の一室で、部屋代月一万七千円。トイレ共同。部屋の片隅に簡単なキッキンがついていた。風呂無し。最寄り駅はJR目黒駅。

親からは相変わらず仕送りなどなかつたので、自分で働きながら生活するしかなかつた。アルバイト求人誌で、夜間の道路交通警備員の仕事を見つけた。これなら自分でもできそうだつたし、昼間大学に通うこともできる。急いで申し込んだ。一日日当五千円だつた。週に五日ほど働けば、何とかしのいでいけそうだつた。後期の学費も貯めなければならなかつた。本来ならば、しなくともいいような苦労だつたのかもしれない。でも、これが自分で選んだ道だつた。夜、作業員や酔払いに怒鳴られながらも働き、昼間眠い目をこすつて大学の講義に出席していた。支えていたのは自分は自

立した大学生だという自尊心のみだった。

夏休み前。大学のアルバイトの掲示板で塾講師の求人票を見つけた。ひと夏で四十万近く稼げそうだ。まとったお金が欲しかった私は飛びついた。これで後期の学費は何とかめどがつきそうだった。

裸電球一つぶら下がった部屋には眠りに帰るだけの生活だった。明日が見えなかつた。ただその日一日を過ごすだけで精一杯の日々だった。

塾講師として、七月が模擬授業などを行なつた研修、

八月から実際に生徒の前で教壇に立つた。「先生」と呼ばれて、気恥ずかしい思いをした。金のためだけではなく、生徒のため、一生懸命授業をした。遣り甲斐があつた。大学を出たら、教師になるのも悪くないと思つた。生徒にも慕われていたようと思う。自分に向いているような気がした。塾講師で得たお金で後期の授業料を支払つた。九月からはまた夜間の道路交通警備員に戻つた。

秋も深まると、寒くなつてきた。屋外での勤務が辛くなつてきつた。そこで、系列の警備会社がやつているシティホテルの警備員に鞍替えした。屋内だから、寒さも気にならない。従業員割引で格安の食事を摂れるのも魅力的だつた。ホテルの従業員用の風呂も利用で

きた。大助かりだつた。仕事も楽だつた。警備会社の社員さんから、大学を出た後正式に正社員にならないかと誘われたこともある。

「自分は教師になりたいので」

丁重にお断りした。自分の中に、このままで終わらたくはないという野心があつた。

冬休みにはまた塾講師をやらせてもらい、ホテル警備員と掛け持ちで働いた。正月も休まなかつた。稼ぎ時だつたからだ。

期末テストが終わり、春休みになると、大手出版卸会社の在庫整理員として働いた。まとまつたお金、四年生の学費を稼ぐ必要があつた。ホテルの警備員ではそれほど稼げないと思っていたことにもよる。塾講師は人間関係のもつれで継続できない状態になつていた。

何とか四年目の学費も工面した。最終学年、他の同級生は就職活動に追われていたが、私はバイト三昧だつた。その日一日をやり過ごすのに相変わらず苦労していた。母校の高校に教育実習に行つた。東京と富山の公立教職員採用試験を受けたが、二つとも落ちた。その他、私立高校の採用試験も落ちた。私はとりあえ

ず大学を卒業しておき、来年再度採用試験を受けるつもりでいた。

夏休み前、同級生の女の子から面白い仕事があると聞いた。遺跡発掘作業員。日当五千円で、学術的な勉強もできるみたいだし、やつてみたいと思つた。紹介してもらつた。

発掘する遺跡の場所は東京のど真ん中、千代田区紀尾井町にあつた。私が住んでいるのは目黒区で、比較的近距離なので電車で通えるのがよかつた。日曜日以外、毎日通つた。私は文学部史学科の学生であつたが、学業の方は超低空飛行であつた。が、ここに来て俄然考古学に興味を持つた。将来教鞭をとりながら、その道の研究をするのも悪くないよう思えた。他の大学の学生との交流もあつた。女子学生とも親しくなれた。教員採用試験に受かるまで、この遺跡発掘作業員で食つていきたいと思つた。

卒論を書き終え、卒業に必要な単位もパスした。苦労苦労の連続であったが、無事卒業することができた。我ながらよく頑張つた。感無量だつた。

大学を卒業した四月、合宿で車の免許を取りに行くことにした。合宿先は栃木県西那須野。最短で二週間で取得できるコースだつた。私は一度大学一年生の

春休みに、通いで免許取得を目指していたが挫折した経験があつた。今度はそうならないようにしたかった。合宿の期間は自動車教習所近くの旅館に寝泊まりすることになった。よつて、住むところと三度の食事、風呂などが用意されている快適な生活であつた。合宿でかかる費用はすべてまだ加入していた大学の生協でローンを組んでいたので、生活費などを気にして働く必要がなく、免許を取得することだけに集中できた。ただ、不器用が災いして仮免の実技で三度落ち、教習所卒業まで一ヶ月を要した。桜が咲く季節を通り抜け、ゴールデンウイーク前までかかつた。それでも最後は鮫洲の自動車教習所での学科試験に一発でパスし、免許を取得できた。

ゴールデンウイーク後、発掘調査の現場に戻つた。すると、この現場は五月いっぱいで調査終了で、作業員は他の現場に移るかどうかするしかないという。

私は思案した。発掘作業員を続けるとしたら、電車で一時間以上もかけて他の現場に行かなければならぬ。そこまで考古学にかける情熱は、自分にはないよう思えた。お金を得るためにだけ、働くことが目的だけなら他にも面白い仕事があるような気がしていた。

現に、新聞広告で自分にもできそうな、やりがいのある、面白そうな仕事を見つけた。求人を出していったのは、出版社だった。募集している業務は編集と総務だった。資格は四大卒で要自動車普通免許とだけあった。私は当てはまつていた。

編集という仕事にも興味があつた。手に職をつけにはもつてこいだ。私は早速その会社に電話してみた。面接の約束を取り付けた。

その出版社は目黒区の柿の木坂を上つたところにあつた。私は一張羅の紺のスーツを着て出向いた。まづ簡単な筆記試験があつた。経理部長だという四十代の眼鏡をかけた男性面接官とまず顔を合わせた。  
「編集は経験者しか採用していないんですよ」  
希望職種を聞かれ、編集と答えると、そんな返答が返ってきた。それでは駄目かな、と思つていると、「君は人がよさそうだし、野球ができるらしいから総務でどうかね。もし、それでよかつたら、次の面接官に紹介します」

どうやら、総務としてならば、一次面接はパスしたことになるらしい。

「総務でも構いません」

私は応えた。別にどうしても編集でなければならぬこだわりなどなかつた。働く場所が必要なだけだつた。どこでもよいというわけではなかつたが、自分はまだ社会に出た手で、あんまり世の中のことが大学生時分に苦労した割には分かつていなかつた。まずは社会での自分の足場が欲しかつた。

次の面接官は女性の総務部長だつた。四十年代。経理部長より偉いみたいだ。面接の主導権を握つているようで、場を仕切つていた。

「君、意外とかわいい顔しているのね」

女性総務部長に言われて、どきりとした。顔が紅潮する。これはからかわれているのだ。自分に言い聞かせた。私はどうしてもこの会社で頑張りたいのだと意欲を言葉に乗せてアピールしようとした。うまくできたかどうかわからないが、必死だつた。

「そう、それじや、最終面接、社長に面接してもらうわ」

女性総務部長はあつさりとそう言つた。話がトントン拍子に進んでいるようだ。

この出版社の社長というのは、高名な漫画原作者だつた。現在ホテルに缶詰め状態で都内のシティホテル

に宿泊しているという。私と女性総務部長が車に乗つて港区にあるそのホテルに向かうことになった。運転手は別の社員が行うようだ。

「社長はとにかく忙しい人だからね」

念を押された。車は首都高速に乗つたが、渋滞でなかなか進まなかつた。途中、おそらく社長らしき人物から催促の電話が鳴つた。女性総務部長がしきりに弁明していた。

車がホテルに着いた。

「急いで」

急かされた。ホテル一階奥の喫茶店に連れて行かれた。席に着き、しばらく待つていると、今まで感じたことのないオーラを持つてゐる初老の男性が現れた。それが社長だつた。

「君か、新しくわが社に入りたいというのは」

「……は、はい」

私は緊張してゐた。

「自己PRをしてごらん」

言われて、私は大学時代新聞配達をはじめ、いろいろな職に就き自分ですべて賄つていたことを語つた。

「そうか、新聞配達をやつていたのか」

「はい」

「あれは結構きついよな」

「は、はい」

「でも、おかげで足腰が強くなつただろう」

私はその言葉を聞いて、目から鱗が落ちる思いがした。新聞配達をやつていたんだつて。それは大変だつたね。苦労したんだね。大多数の人はそういうのに、この目の前の前回の社長は苦労したこと普ラス思考として捉えている。今までそんな人に出会つたことはなかつた。私はいつぺんでこの社長のポジティブさに感化されてしまつた。

「君はなかなかちょっとやそつとじや音を上げない顔をしているな。よし、合格だ」

社長はそれだけ言うと、席を立つて去つていつた。後に残された私は呆気にとられた。

「社長が合格と言つたので、君は合格です。わが社の社員になつてもらいます。いつから働きに来られますか？」

女性総務部長が言つた。私は切りのいい六月一日からと答えた。私は直接に合格したのだ。六月からこの会社の正社員として働くことになつた。

その頃はまだ引き続き、四畳半の部屋に住んでいた。

最初賃貸契約を結んだ時、期限が二年だったのと、四月に新たに契約延長を申し出た。敷金が一ヶ月分余計にかかった。致し方なかつた。

六月一日。初出社日。私は総務部総務課に配属された。主な仕事は社長の身の回りの世話をすることだつた。会社の定時は午前十時から六時だつたが、社長は主に夜執筆活動をするため、私の部署は二十四時間体制だつた。當時四、五人でローテーションを組み、勤務にあたつていた。

社長は仕事に厳しい人だつた。よく怒られた。プライベートな時間はほとんどなくなつた。部屋には寝て着替えるためだけに帰るような日々が続いた。それでも私は持ち前の根性で食らいついていた。せつかく入社した手前、早々に辞めたくはなかつた。

仕事にも何とか慣れた年の暮れだつた。  
「今度アパートを建て替えるので、早々に退去してもらいたい」

家賃を持つていくと、突然大家に宣告された。確かにアパートは老朽化していた。だが、あまりにも一方的だつた。私には次の棲み家を探す時間的余裕などない

かつた。仕事に追われていた。

年が明けた一月いつぱいでそのアパートを追われた。居住権を主張すると、明らかに今まで住んでいたアパートよりさらにランクの落ちるボロアパートを紹介され、私は致し方なくそこに家財道具を置いた。そこはとてもまともに住めるような部屋ではなかつた。そこもすぐに建て替える必要がある物件だつた。

会社には仮眠部屋があつた。というのは、社長の原作をもとに漫画を描く作画部の社員が寝泊まりできる用の小部屋であつた。私はしばらくそこを利用した。

また、新聞配達時代の後輩や大学で知り合つた友人宅を泊まり歩いた。二月の、一年で一番寒い時期だつた。でも、こんなことばかりはしていられなかつた。私は一念発起して、本格的に自分の居住地を探すことにしてしまつた。会社近くの不動産屋で、横浜市港北区のワンルームマンションを紹介された。いい加減転々と寝泊まりする生活に疲れていた私は、多少家賃は高額であつたが、そこに決めることにした。

会社のワゴンを借りて、引っ越しをした。今度は六畳一間ながら、キッチャン、ユニットバス付きであつた。生まれて初めて、風呂のある家に住むことになつた。感激だつた。新築だつたが安普請で、頻繁にゴキブリ

が出没するのには辟易したが、あまり気にせず、快適に暮らした。家賃五万八千円。最寄り駅は東急東横線菊名駅。

契約は二年ごとに更新する契約だった。一年経つて、新たに契約をすると、家賃が一割値上がりした。私は仕事が忙しく、部屋には帰つたり帰らなかつたりの日々が続いた。掃除はあまりしなかつた。

毎日せかせかと働いていると、月日の流れるのが早かつた。私はあまりにも忙しかつた出版社を辞め、時計宝飾品の卸会社に転職した。その会社は御徒町につた。地下鉄で乗り継ぎなしの一本で行けたが、片道に一時間半近くかかつた。会社での配属は宝飾営業部二課だつた。関東郊外のホームセンターや量販店に安値の宝飾品を売るのが仕事だつた。

横浜のマンションに住んで、ちょうど二度目の契約更新の時期が来るので、私は引っ越すことに決めた。引っ越し先は会社に程近くて、家賃の比較的安い千葉県市川市である。

神奈川から千葉へ、関東を横断することになった。今度も六畳一間で、キッチン、ユニットバスが付いた家賃五万五千円の部屋だつた。最寄り駅は地下鉄東西線の南行徳駅。

そのうち、会社で結婚相手が見つかり、一緒に暮らすことになった。まずは二人、会社に内緒で同棲生活を始めた。新居は私がそれまで住んでいたマンションの近くの2DKのマンションだつた。家賃は七万二千円とそれなりに高かつたが、二人が共稼ぎして働いていれば何とか払える範囲内だつた。

私たちは正式に結婚した。結婚しても生計を立てるのに苦しかつたため、共働きのままだつた。フロアは違つていたが、同じ会社で働いていた。  
「夫婦で同じ会社というのはな……」

会社内に、どことなくそんな風潮があつた。私たちは子供が欲しかつたこともあつて、妻が会社を辞めることにした。その分、収入が減り、家計が苦しくなつた。妻は別の会社にパートに出ることにした。

それでも家計は苦しかつた。私たちはさらに家賃の安い都心から離れた場所に引っ越す必要に迫られた。妻の実家が千葉県八千代市にあつた。その近くに大きな公共団地があつた。そこに入居することにした。部屋の広さは変わらず、2DKである。子供ができる親子で暮らすにはちょうど良い広さであつた。手頃な物件だつた。家賃五万八千円。最寄駅は京成電鉄の勝田台駅。

妻が妊娠した。同じ時期に、妻の父親が胃がんで他界した。妻に弟がいたのであるが、結婚して家を出でた。妻の実家には妻の母親が一人で住むことになつた。義母は突然伴侶を召されたものだから、かなりの衝撃を受け、食事も満足に喉が通らず、点滴を打つてからうじて生きていた。

翌年の四月、不景気の影響で、私は会社からリストラ宣告を受けた。子供が間もなく生まれる一か月前のことである。妻は気丈に、大丈夫だと私を慰めた。本当は私の方が妻を支えなければならぬのに。不甲斐ない自分を罵つていた。

五月二十一日。私と同様帝王切開の末、子供が生まれた。女の子だった。私は無職のままだった。

名前を授けた。娘は元気な産声を上げていた。妻の産後の乳の出も良好だった。家庭は安泰であった。

私は職を求めた。が、折りからの不景気でろくなものがなかつた。私は三十路を越え、際立つた特技資格がなく、そしてこれといった実績もなかつた。学校を出たばかりの若者と同様の扱いを受けざるを得なかつた。それが屈辱的なことのように感じていた。えり好みしている場合ではなかつたが、就職先はなかなか決まらなかつた。

ようやく、近所の流通倉庫で軽作業のパートの職にありついた。日給六千円。勤務時間は午前九時から五時まで。中元歳暮の時期には早朝出勤や残業があつた。その分手当がついたが、それでも薄給であつた。娘は順調に育つた。寝返りが打てるようになつた。つかまり立ちができた。可愛いさかりだつた。

「母がね、一緒に大阪に帰らないかというのよ」

ある日、妻がぽつんと言つた。突然のことだつた。私にしてみれば、寝耳に水だつた。妻の両親はもともと大阪の出身で、父親の転勤に伴い千葉に来て、家を構えたのであつた。妻の母親は夫に先立たれ、子供も独立し、急に一人ぼっちになつたのが心細くなつたのだと思う。生まれ育つた大阪が恋しくなつたというわけだらう。親類縁者友人知人も向こうに多数いるみたいだつた。

私は沈黙した。職も定まらず、一家の大黒柱のくせに不安定な状態である。一緒に私も行かないかといふのか。私は大阪には行きたくないがつた。私は長男だつた。郷里の富山には私がいづれ帰つて来るであろうと両親が首を永くして待つてゐる。見ず知らずの土地に行くのは嫌だつた。誰も知つた者がいない所だ。同じ日本国内とはいえ、昔ほどではないにしろ、若干文化

や風習が違う。

それから私と妻との間に、気持ちのずれが生じ始めた。どうやら妻も大阪に帰りたがっているみたいだ。私は困窮した。最悪の事態も想定した。そして、その通りになってしまった。

「しばらく離れて暮らそう」

どちらからともなく、そう言つた。私は離婚は避けたかった。けれども、妻から大阪ではシングルマザーに一定の手当てが出るというので、離れて暮らすのであれば離婚というちやんとした形にして欲しいと懇願されて、泣く泣く離婚届に判を押した。愛しい娘と離れ離れになるのが一番辛かつた。離婚が決まつた日、娘は髭面の私の顔を見て怯え泣いた。まだ物心もつていながら、自分の両親が離婚するということがどういうことなのか、これから自分の身の上に降りかかる事象について理解できていなかつたであろう。

私も富山に帰らざるをえなかつた。盆や暮れに度々帰省はしていたが、本格的に腰を落ち着かせて故郷に居つくのは十何年かぶりだった。経済的に乏しかつたので、両親の家に同居させてもらうことにした。

我が家。風呂のない中二階の木造家屋。トタン屋根で、雨が降るとびしやびしや音を立ててうるさかつた。

それでもここが我が家だつた。他にどこにも行くところがなかつた。戻るつもりはさらさらなかつたが、どうやらこうなるのが逃れることができない私の運命のようであつた。再び銭湯通いをしなければならなかつた。妹は石川県能美市に嫁ぎ、両親と私、親子三人で暮らすことになつた。

それから月日がまた流れた。昨年八月二十九日、父が亡くなつた。父はアルツハイマー型認知症を患つて明らかにおかしくなつており、その前の年の十一月から介護施設付きの老人病院に入院してから、私と母の覚悟は決まつていた。すんなり、眠るようにあの世へ旅立つてくれたので、どちらかといふと安堵していた。葬式は家族葬で、近親者だけ集い、無事終わつた。私が喪主を務めた。

母の知り合いである司法書士に頼んで、遺産相続をした。父の名義だつた土地と家屋が私の物になつた。時価にしていくらくらいだろう。以前、こつそりネットで不動産屋に鑑定してもらつたことがあつた。父が亡くなる前の話だ。

「土地だけで五百万円です。家屋はかなり古いようなので、値段がつきません。逆に解体費用がかかります」

そのような回答が返ってきた。

「街中は騒々しくて嫌やわ。静かな郊外で住みたいわ」

父が亡くなつた後、母がしきりに口にするようになつた。母はもともと富山市郊外の出である。郊外にある家賃が低額の市営住宅の空き状況をしきりに気にするようになった。

実は今住んでいる家は戦後の混乱期に立てられたものであり、隣家との境界線をはみ出して建てられていた。その件について、家を購入する際、とやかく言わぬことと両者で取り決め、一筆書いたにもかかわらず、お互ひ諍いが絶えなかつたため、母親は疲れてしまつているということもあつた。どこかに移り住みたがつていた。

また、引っ越すことになるかもしれない。私の身の回りが騒々しくなつてきた。私に異存はない。このみすばらしい家とはおさらばできるなんて、結構なことだ。引っ越しでもして、私自身、人生を心機一転させたい気持ちもある。望むところだ、と思つた。

今度はどんな家に住むことになるのだろう。



# 涙いくつ

藤野繁



## 一、取り戻せない一日

至福となる時間が台無しになった。行きつけの定食屋の女将が、いつになく無愛想だったからだ。

月に一回ほど、仕事がひと区切りついた週末休みに、JR富山駅前の繁華街へバスで出向く。そして古びた定食屋で、年季の入った厚い木作りのテーブルカウンターに腰かけ、あつあつのアジフライ定食とビールでひと息つく。まずは突き出しの柿ピーナッツでコップ一杯目のビールを飲みきる。

ほどなくキヤベツ切りが山盛り付いた、ぶ厚いアジフライが出てきてかぶりつく。

かれこれ十年以上通っている店である。浮辺<sup>うきべ</sup>はつると同年代、六十代半ばの女将はいつも「いらっしゃいませ」と明るい声で出迎え、笑顔でビールをついでくれ、うれしかった。

令和二年暮れのことである。女将は確かにいた。終始無口、無愛想であった。白髪がめつきり増え、やつれた様に見えたものの、「今日は元気ないね、どうかしたの」と声を掛ける気力も失せるほど、雰囲気は良く

なかつた。

浮辺が長年覚えている、ささやかで温かい休息の時間が、一変して冷たくなつた。

いつものビール、つまみの追加も、もちろん無く、

早々に店を出た。

どんより曇りがちの、年暮れの寒さがよけいに身にしみた。

あれはないだろう。あれはひどすぎる。しばらくは行くのは止めよう、浮辺は自分に言い聞かせ、重く淀んだ心を抱えて帰宅した。

鉛のように重いものが、心中沈んで数日ほど気持ちは晴れなかつた。

令和三年の正月が明け、北陸に三十数年ぶりの豪雪がきて、一月があつという間に終わつた。逃げるよう二月、去るよう三月が過ぎた。

コロナ禍で、家に引きこもることが多くなり、足の遠のきにさらに拍車を掛けた。

あれは別人だつたのだろうか。いや間違いなく女将だ。病気で体調が思わしくなかつたのだろうか。それともコロナ禍で客足が鈍り機嫌が悪かつたのかかもしれない。

四月の半ば、すっかり春めき、ポカポカ陽気に誘われた休日。城址公園を散歩した。ふと思いつ出して、久しぶりに定食屋に寄つた。なんだか胸のざわめきが聞こえてきた。

入口に張り紙があり、立ち尽くした。

「二月初めに女将が急逝し、しばらくお休みいただいておりましたが、コロナの収束も見えてきません。三月末をもつて閉店することとなりました。長い間、お世話になり、本当にありがとうございました。誠に申し訳ありません。店主」

女将はやはり、体調を崩していたのだ。

あの日に、女将！いつもと全然違うよ、と怒らなかつたのか。もう取り戻せない一日。浮辺は自分に猛烈に腹が立つて、涙がにじんだ。

## 二、命つながる

「先輩、歯医者へ行くヒマもありませんでした、本当です」

令和二年の春先、長く一緒に仕事をしていたK課長が辞めた。三十年余り勤め、五十歳を過ぎた後輩の営

業マンであつた。慌ただしい退職あいさつの言葉である。

「そんなに行き詰つていたのか、すまん一浮辺は、自分の推察力の無さに愕然とした。

転職先は決まっており、その間の二ヵ月は、歯の治療に専念する、という。

「ガタガタになり、駆け込んだ歯医者さんで、凄く叱られました。命より会社が大事なんか、と強く諫められ、仕事に行き詰まりを感じていたし、女房と何度も相談して辞めることにしました」

彼が去つてから数日たち、気掛かりな仕事がひと段落し、二十年前へと浮辺は飛んだ。

当時四十年代半ばで、営業も多忙を極めていた。お得意の接待や同僚との飲み会も重なり、かなり無理をしていた。

ひどく蒸し暑い、梅雨空の、どんよりとした六月半ばの朝だった。

二日酔いで淀んだ頭で出社した。なんだか口の中がおかしい。歯がかばつと浮いたような不快感がある。営業に走る気力も失せた。につちもさつちもいかない状態で、近くの歯医者に駆け込んだ。

口腔を洗净し、歯茎周りに針を刺しての検査は痛くて辛かつた。自分のむやみな営業姿勢が情けなくなり涙が出てきた。ひと通り調べた先生が、顔を赤らめて怒り出した。

「これはひどい歯周病です。もう少し放置すると歯を抜かないといけなくなるばかりか、全身に毒が回り、大変なことになる。心を入れ変えて半年通院してください。その都度、歯磨き指導も徹底して行います。浮辺さん、歯は、命につながる、一生ものですよ」

浮辺は、歯医者さんの指導を守り、歯磨き、口腔洗净を徹底して行い、五年間通院し、二十五本の歯を維持している。浮辺を叱ってくれた同年代の先生は、五十歳すぎに脳出血で倒れ、歯医者は廃業した。

先生は先生なりに、いろんなストレスをかかえていたのだろう。人生は何が起ころうか分らない、とつくづく思う。

五十年前、浮辺の父は、五十五歳の若さで、すい臓がんで亡くなつた。当時二十歳前の浮辺は、酒の飲みすぎがたたつたと思っていたが、間違いなく歯が原因だつた。

五十歳ごろに総入れ歯となつた父は、その後病気が

ちになり、ガタガタと衰えていった。

後輩の退職、浮辺の四十年代、父の死、歯にかかる話は、命につながっている。

不意の病で倒れた歯医者さんの、顔を赤らめて怒った姿。あの怒りがなければ、浮辺の人生はずい分短いものになっていたに違いない

### 三、居残る幸せもある

平成の初め、バブルの頃、入社二年から三年の後輩営業マンが立て続けに辞めた。

当時三十歳を過ぎ、結婚して娘二人が生まれ、会社での責任が少しずつ重くなっていた浮辺は、かなり疲れていた。

毎月のようにイベントを抱えて胃の痛い毎日を過ごしていた。さらに営業が行き詰った企画の後始末に駆り出される。遅くまで仕事に追われ、その後、先輩、同僚に誘われて飲みに行く。家に帰ると、小さな娘を抱いた女房が、「お父さん、これじや、孤児と同じよ」と愚痴を言つた。

新しく入った新卒の営業マンは、最初はハツラツと

しているものの、浮辺のイベントの実地見習いや企画営業の同行がひと通り終わると、何社かのお得意と担当エリアを与えられて、ぶっぱなしになれる。

このぶっぱなしが、退職を考え出す元になるのだ。だが浮辺は構つてやれなかつた。

浮辺自身が、忙しさを自分で消化できなかつた。後輩が独り立ちする時期以降、ぶっぱなしにならざるを得ない状況だつたのだ。

これから仕事を任せたい人材が、雪崩のように去つていくのは辛く、苦しかつた。小手先の説得では、彼らを止めることは出来なかつたのである。

浮辺を嘲笑うかのように、次々と彼らは背を向けて去つていった。

ある日、退職辞令が出て会社を去る入社4年目M君の机の上に「先立つ幸福をお許しください」とメモが残されていた。浮辺はそのメモを名刺入れに入れて保存した。

数ヵ月後、東京の外資系の上場企業に再就職し、元氣でいると便りをよこした彼に「先立つ幸福もあれば居残る幸福もある」と少し悔しい思いで返信した。

あれから三十年が経過した。

ふと思いつ出して彼に便りを出した。「あなたのいた

頃の営業マンはほとんど居なくなり、あのころの面々では、自分一人が残つてゐる感じだ。歯を食いしばり、会社に居残つたが、それが正しい、とも間違つていたとも、よく解らない。ひとつだけ、あのころ、背を向けて去つていったあなたたちに、詫びたいのは、もう少し、話を聞いてあげることが出来たなら、と思うことだ、今更でごめん」

M君から思ひぬ便りが返つてきた。

「歯を食いしばつて居残つた浮辺先輩は立派な勝ち組です。転職先が山のようにあつたあの頃、こんな、ぶつぱなしのひどい会社にいられるものか、と反感を勢いに、温かい幸せな世界へ、と転職していつた私たちに、向こうは向こうで甘くはなく、新しい海は冷たかつた。私たちは、冷たい海の怖さがわかります」

勝ち組はしつくり来ないが、浮辺は彼らが雪崩のよううに辞めていった数年後、繰り返す胃潰瘍から、医者にこのままだとすぐに死ぬ、と脅され、完璧主義を止め六十点主義に切り替えるなどして、自分を整理できるように仕事への姿勢を変えていった。

浮辺には幼い頃から、少し変わつたところがある。左投げ、右打ちはわかるが、お箸は右、ボウリングも右、つまりバラバラなのである。

広告業界の先輩によれば、これはゴルフには最も向いている、という。しかし浮辺は還暦を過ぎてゴルフデビューしたもの、二百たたきを二回し、同じ組のメンバーやキャディの嫌な顔を見て落胆してしまい、それ以来、遠慮している。話はそれだが、涙には限りなく種類がある。

高校合格した時、婚約した時のうれし涙。クレームばかりのスponサーと喧嘩別れした時のくやし涙。良く遊んだ同級生が五十過ぎで急死した時のぼう然とした涙。無理な仕事に食らいついて多額の借金をこしらえて行き詰まり、女房に金の工面を頼んだ時の落ちぶれ涙。人生にはいろんな涙がある。

笑うよりも泣いた方が多かった、という人もいれば、笑つてていることそのものに涙が含まれてたりすることもある。笑つて泣いたり、泣いて笑つたりもする。

#### 四、バラバラ人間

浮辺もどれだけ涙を流したか、数えきれないが、振り返ればいつも、そこに人がいて、物語があった。

浮辺がここに来るまで辿った道は平たんではなかつた。デコボコの過程で、彼を救つたのは、浮辺自身がどこかで培つた、可愛がられる天性があつたからだ。それが涙を誘つたり、可笑しくて笑つたりして、壊れる寸前の人生の緩和剤になつたと思う。

よく生きていた、と思う場面もあつた。

可愛がられる天性、それは父母であり、兄姉であり、親戚や従弟、故郷芦嶋の住人、小中高の同級生、仕事の上司、同僚や先輩、後輩、そしてたくさんのお得意、人生で出会つた多くの人たちのおかげである。

浮辺を拾つた猫同然に採用した役員。寄生虫と言ひ放つた建設会社の部長。話が違うと激怒したお得意。あなたの人生の目的は必ず達成される、と高額な教材を契約した後行方不明になつたセールスマン。皆私の出会つた貴重な人、人生である。

浮辺が今、思い出す人々は、につこり微笑んだ人ばかりではない。あなたみたいな詩を書くロマンチストとは生活出来ない、と背を向けた彼女もいた。

仕事でも背を向けた人は山ほどいる。会社でも冷たい目で見られることは度々だ。

そして、浮辺と結婚し、みなしへ同然とくどきつても支えてくれた妻。家を放り出す私を「お前なんか父親じゃない」と怒つた長女。「お父さん、私、結婚する。いい報せを届けてくれた次女。

いくつもの涙が人生ならば、バラバラ人間も面白い、と笑つて生きよう。還暦からの幸せを決めるのは、これから、なのだから。

(了)

# 加賀金城魔界伝説

## (前編)

プロローグ

大槻伝蔵の怨霊嘶く

池田 良治



男と、鳥刺しは闇のなかを駆けていた。

倉ヶ岳の山頂あたりである。

下から大勢の捕手が迫っている。杣道を、草地を、踏み分けのぼつてくる木々の折れる音、小石を蹴散らす音が、次第に網を狭めるように近づいてくる。

「もう駄目だ。夜が明ける。逃げ切れない」

「なに気の弱いこと言つてらつしやるんです。さあ、この木の陰でひとやすみしなせえ。さあ、あつしと着物を取り替えて」

「おいおい、何をする」

「着物を替えて、生き延びることです。生きて、生きて、生き延びて、復讐するんですまし、捕まる」

「どうする?」

「ここであつしがあなた様になりますまし、捕まる」

「殺されるぞ。無茶な!」

「まあまあ、続きがあるんで…」

「鳥刺しは男を宥め、切り株に腰をかけさせた。

「あつしが捕まつて、それで刻を稼ぎます。しづかになつたら、この山を降りて九万坊現の宮へお入りなさい。そこで天狗が待つてます」

「天狗？」

あつしら鳥刺しとは親しくしてある異類のものです。われりはつけてあります。変化のものですが、けつしてわたしらに悪さをいたしません」

「それで」

「はい。彼らの案内で逃げてください」

「どこへ、逃げるのだ」

「ははははは……この世ならぬ世界：異界：魔界……、奴らの世界」

「うむ……」

捕手たちの足音が迫ってきた。

「さあ、はやく……」

二人は急いで着物を交換し、着替えた。

背格好はほぼ同じで、遠目には区別がつかないだろう。

鳥刺しは腰にぶら下げていた瓢箪から黒い液体を手へ振りだした。

漆だ。ねとねとの汁である。それを躊躇いなく顔へ塗りたくった。

見る間に顔は腫れ上がり、面相が変わった。

苦しい息のもとで言つた。

「これで……しばらく……ほんのしばらくの……お別れでご

ざいます。ではまたお目もじします……」

そういうと男は風を食らつた凧のように、山肌を駆け下りていつた。

\*

すべてを凍てつかせる風が吹き渡つた。  
十一月の丑三つ刻である。

香林坊にある造り酒屋辰巳屋の前を通りかかつたとき、女の叫び声がした。

助吉はしばらくじっと耳を澄ませたが、その後はなんの音沙汰もない。

しかし突然「ぐわっああああ……」。

獣のような叫び声。断末魔のような凄まじいとても人とも思われない叫び声。ひどく殴られたか、刺されたか：幾度も、幾度も腸を抉られるような：聞くに堪えない声だった。叫び声はどうも辰巳屋の屋敷のなからであるらしい。辰巳屋は菩提寺の本念寺の報恩講でみな羽昨へ帰つていて主人を始め手代、奉公人はだれも残つていないはずであった。

(奇妙だな)。

が、小心者ゆえ戸を破つて入るほどの勇気も起こらない。かといって棄てもおけず、とにかく女の叫び声がした方角へいってみることにした。裏手にまわつて

みると、湯屋らしいところからもうもうと湯気があがつている。

そこへちょうど、仕事帰りか、傘をかずいた夜鷹が通りかかった。

夜鷹をなだめすかして、しん公の蕎麦屋にいるであろう岡つ引きの理吉を呼びにやらせた。

夜番で与力と一緒に市中を見回りすることになつて

いた理吉はひとり蕎麦屋にいた。

与力はいつまでたつてもやつてこない。

岡つ引きの理吉は頭の冷えを手拭いで覆いながらしん公の蕎麦屋で暇をもてあましていた。

理吉の目鼻立ちは端正そのものだったが、まだ三十

に届いていないはずであるのにすっかり髪は抜け落ちていた。この稼業の厳しさのせいかもしれない。

「こう寒くちや、やつてられない」

野良猫が一匹妙に親しげに足に絡みついてくる。

「今頃は馴染みの遊女と抱き合つて寝てんだろうな：

こつちは野良猫かよ」

そこへ夜鷹が来た。

「旦那、事件じゃないんですかい？」

いまままで姿が見えなかつた蕎麦屋のしん公が、ぬつ

と立ち上がつて話しかけてきた。

辰巳屋の広壯な表戸に來た。

「鍵、掛かつてないぜ」

理吉は助吉にこともなげに言つた。

戸口をぶち壊すため、ちようなのような道具を調達して身構えていた助吉は拍子抜けした。

戸を開ける。

冷たい暖簾が顔を撫でる。

帳場、広い廊下、土間の酒樽にも人の気配はない。

二人は勝手知つた自分の家のごとく奥へと進む。

奥には贅沢な湯屋が設えてある。

湯屋の戸の前まできた。

入り口に灯りが点つている。

そのままわりに、華美な女物の着物が脱ぎ散らかしてある。

板戸はぴつちりとしまつていてる。

二人は檜の戸を見つめた。

理吉が手を掛けると、戸は手に従つて滑るように動く。

(ここで待つてろ。俺が先に行く)

理吉は目で合図する。

理吉は用心深い。いや臆病なのだ。そろりそろり前

へ進み、湯屋の生ぬるい床に足を踏み入れた。

蒸し風呂の中は白く靄つた蒸気が充満していた。

理吉は思わず鼻を覆つた。

「大吟醸や。それも最高級の……」

後ろで助吉が嬉しそうに呟いた。助吉は長い舌を出して濛々と立ち上る蒸気をうれしそうに舐め回している。

「慥かに、酒」

理吉は注意深くあたりを見た。

いきなり助吉が、女のような悲鳴をあげた。

心底驚いた理吉は、振り向いて怖い顔で助吉を叱咤したが、大声を上げることは危険だった。

蛇だ。死んでいるようだ。もう一匹が戸の溝にいた。こちらはびくりびくりと動いている。

恐がる助吉を手まねで制止しようとして横を向いた。

空中に女の首が浮かんでいる。湯屋の側面に置かれた大きな鏡に女の顔が映つていたのだつた。

湯船の中央に整つた瓜実顔が浮かんでいた。目を閉じた女。ここ辰巳屋のお内儀、おみつに違いない。

雪のように白い肌で評判の美人妻で、辰巳屋の主人が鍾愛することこの上ないと市中もっぱらの噂である。

つた。

湯船にぴたり重なる覆い蓋の表面に一尺四方くら

いに穴がくりぬいてある。そこから女の顔が出ている

のだ。巨大な姿見に映つたものを見ると、それが湯船に女の首だけが宙に浮いているように見えたのだった。

理吉は湯船の蓋を取りのけようとしたが、蓋は重くがつしりとしていて、ぴくりともしない。理吉は後ろの助吉を招いた。二人で蓋を持ち上げた。一瞬、すうつと女の首が消えた。

蓋の下が見えた。

「なんだ？」

湯船いっぽいの蛇だつた。

酒浸りになつて潤んだ赤い目をした蛇たちが、女の白い裸体に無数の鉛色の細帯となつて巻き付いていた。蛇は生きた鞭のようにならべられ、女の肢体に簇がり執拗にぴちや

ぴちや鞭打ちのたくつてゐるのだ。

理吉は沈み込もうとする女の顔を慌てて掬い取つて、湯船から絡まる藻ようになつた蛇の中から、女の躰を引き上げようとした。重い。

裸の女は両手、両足を絹紐で縛られていた。

理吉は蛇で溢れかえる湯船に浸りになりながらも、やつとのことで女の躰を救い出し、隣の部屋へ運んだ。

手足の絹紐を切る。

指で首の脈に触つた。

脈は微かながらある。そして女の口元に頬を寄せた。むつちりとした女の全身は蛇に無慙に食い千切られ、こまかい擦り疵の網目で蔽われていた。

理吉は着物を脱ぎ、褲ひどつになつた。

「早く、医者を、桂庵先生を」

理吉は外へ声をかけると、懸命に女の胸を押し、息を吹き入れた。理吉は桂庵のもとでしばらく医者の助手として仕えたことがある。

助吉は廊下へ飛び出し、あたふたしながら桂庵のもとへ走つた。

十三度目に理吉が女の口へ息を吹き込んで、唇を離したとき、女の口から突然蛇がのぞいた。頭を擡げてぬるりとでた。陰門か黄門から入り、内臓を食い破つて上まで登つてきたものらしい。女の表情が急に生動して恐ろしいくらい目を剥いて歯を食いしばると、口から外へ出ようとする蛇の胴をあつという間に前歯で抑え食い千切つてしまつた。そして断末魔の呻きをもらしながら悶絶した。

理吉は蛇の血潮を浴びながらも必死に介抱した。胸を二十五度押したとき「ごきり」と音がして肋骨

が折れた。

女の両の白い乳の狭間から赤みがしだいに広がつていつた。そこへ桂庵がきた。

理吉は女の胸に奇妙な痣があるのに気がついた。ちょうど、大豆を小皿に五つ並べたような形をしている。それは艶やかな柄餅色をしていた。

「めづらしい痣もあるもんだ」

桂庵は痣には見向きもしないで、女の首に触れ、口元に頬をもつていいき、次に目をこじ開け、しばらくして首を横に振つた。

「もうこと切れでおる」

そう言うと赤い顔になつて、一同を見回した。

この部屋にも強い酒の臭いが漂つてきていて、四半時もいれば酒に弱い人なら酔っぱらつてしまふほどである。

「誰か、戸を開けてくれないか」

桂庵は酒を嗜まない。桂庵の声に応じて、皆で戸を押し開いた。藍色の空から爽やかな早朝の風が流れてきた。

「生きた蛇は酒に漬けると苦しくて逃げ出そうしてなどんな小さい穴でも潜り込もうとするものじや。気の毒なことじや。『浅尾の蛇責め』か…」

「なんでえ、それ？」

理吉が桂庵を不審な目で見た。

『見語大鵬選』をしらんのかな。はははは。それでも加賀金城の住人かね。家にあるから、興味があればみて進ぜよう』

夜も明けてきた。死体は菰で覆われ、奉行所に運ばれた。

理吉は手控え帳に几帳面な細かい字で今夜の経緯をとりまとめた。

あとで与力がこれをみて綿密な報告書をつくることだろう。しかし何が起こっても加賀金城の風景は変わらない。今日も、昨日と地続きの同じ平安な日が始まろうとしていた。そこへ酒臭い息をまき散らしながら杉田与力が来た。

いつも不機嫌、むつり、剃り立ての青々した月代を弄んでいる杉田与力が、珍しく周章てて死体を検分に走った。そして矢継ぎ早に質問する。

「いつのことだ。なんで、家族の者がだれもいないのに、どうしておみつだけ残つてたんだ？」下手人の目星は？」

理吉は手控え帳をみながら、事務的に答えた。

（なんでえ、夜回りにも来なかつたくせに……）

理吉は奉行所を出た。

おそい朝飯を小料理屋で湯豆腐に粥と梅干しでとつたあと、眠い目をこすりながら桂庵の屋敷へ顔をだした。

桂庵の

いくつていた書物を見るためである。

堆く書物が積まれた桂庵の書斎に案内された。

書香といえど聞こえはいいが、書物の餽えた匂いに満ちた部屋である。

促されて桂庵の持つ和本をのぞき込んだ。

桂庵に指さされたところを見た。

「名代ながら局浅尾、重恩をかふむりながら大悪をなしたる咎によつて、蛇責めの刑にぞ行ひける。大なる瓶の中へ浅尾を入れ、蓋に穴を開け首ばかりを出し、数百の蛇を其中へ入れ、惣身に巻きつかせ、酒をつぎ込めば、蛇酒を呑て其の身くるしさに浅尾が骸を貫き通し苦しましむる」

「こりや、昨夜の辰巳屋の殺しとまるで同じじやないか」

理吉は首をひねつた。

「そうじやな。下手人はどういうわけかわからないが、この『蛇責め』をまねたみたいじやな」

『加賀騒動』を扱つてよく知られたものは

『見語大鵬選』だが、ほかにもいろいろなものが伝わつておる。すべて写本でね』

「いつたい『加賀騒動』つてなんでえい？」

「大槻伝蔵」というのは聞いたことあるだろ。今から二十年くらい前のことじやが、彼が藩主の側室お貞の方と謀つて、二代にわたつて藩主を毒殺する話じや。

五代藩主吉徳、六代藩主吉辰を毒殺し、吉徳の側室お貞の生んだ勢之助を藩主に据え、加賀藩を我が物にしてな。一網打尽さ。大槻伝蔵は配所の五箇山で自殺とされてゐるが、実は斬殺。共謀者も極刑にされたの

という話』

「大槻伝蔵つてどんな人物だつたんだ？」

「加賀藩の六代藩主吉徳に寵愛され異例な出世をしたのが大槻伝蔵さ。百姓の息子で吉徳のお居間坊主として出仕して二人扶持、金二両を得たのを手始めに、やがて吉徳の近習になり、側用人に取り立てられ、それからあれよあれよと出世して、最終的には三千八百石取の人持組に進んだんじや」

「人持組ね。偉い出世したもんだな」

「人持組つまりは上士の身分に相当するからな。ここから家老、若年寄が選ばれる。加賀藩の勝ち組じや

な』

「どうしてそんなに出世できたんだ」

「いろいろかんがえられるが、男色の寵愛からだとうものもいたが、實際有能だつたらしい。新税を取り入れたり、僕約のために人減らしをしたり」

「なかなかのやり手だな。百姓の出自でよくもまあできたものだ」

理吉は身分の差の息苦しさをいやと言うほど知つてゐる。

「そうじや、僕約令を強行して、加賀八家の既得権を握る守旧派筆頭土佐守直躬とぶつかつたんだ」

「それにしても『見語大鵬選』というのはかわつた外題だな」

理吉はなにげなくいつた。

「この外題で通用しているが、たぶん『見語大鵬』という人が選んだものという意味だつたんじやないか、それが外題としてどういうわけか定着した。作者もわからない。どうも加賀藩の事情に詳しい下級藩士が作者に擬せられているけどな」

「ややこしいな。どうして写本でしか流布しなかつたんだい。そんなに読まれる本なら版本で出せば儲かる

の  
に

こはつと

「御法度の禁書というのはあつたんだよ。ちよいと昔には大名のお家騒動を取材した実録体小説を板行して、

遠島になつたり、打首、獄門になつたためしもあつたんだ。版本なんかとてもできない。怖くて板行なんか

したいという版本屋もいないね」

「じや、どうして読めたんだ？」

「だから、さつきもいつたように写本なんだよ。写すんだよ。『源氏物語』みたいね。いまも貸本屋があるだろうが、見料をとつて本を貸す本屋さんじや、そこでさかんに匿名士が写本を造つていたらしい。大名の悪い評判というのは、今の歌舞伎役者の艶聞と同じでね。百姓から町人まで知りたがつたもんじや。いまもむかしも庶民には大名の実際の生活というものは知りがたいけれども、もの凄く関心はもつているじやろ」

「だから、読まれた

「まことではなく嘘がね」

「嘘？」

「そうさ、單なる噂話さ。加賀騒動自体がなかつたんだから」

「どうして、でも本当の話でなんだろ？ 俺も子供の頃なんとなく聞いたことがあるな」

理吉は子供の頃のうすばんやりした記憶をたぐり寄せていた。

「よく読まれたということさ。小説の虚のほうが現実を凌駕したというか。実際は藩主重熙の毒殺未遂事件だけがあつた。犯人は吉徳の娘楊姫付きの中臍浅尾のしづざだつた。首謀者に吉徳の側室真如院が疑われ、実子前田利和を藩主につけることを狙つたと思われたんじや。ところが不思議なことに真如院は最後まで犯行を認めなかつたんだよ。土佐守直躬が居室を探索したところ大槻伝蔵からの手紙が見つかってね。毒殺未遂事件はうやむやになつて、不義密通のほうが一大醜聞となつて喧伝されたんじや。しかしこれもおかしな話で、真如院が江戸から下つて金沢に着いたときには、もうすでに伝蔵は配所の五箇山に流されていて、毒殺に関与できるはずもないのじや、不義密通もあつたもんじやないんじやよ。じや江戸詰の時に密通できたか」というと、これが無理なんじや。誰にも気づかれずに側室のいる部屋に入ることはできない。建物の結構上無理なんじやよ」

「結構上無理」と

理吉は興味深そうに聞いた。

「側室の部屋へいくには、鈴のついた綱でもって、詰め所の者を呼んで開けてもらわなければ入れないんじや。もちろん殿様も同じ。だからどうもこれは守旧派代表格だった土佐守直躬なおみのでつち上げではないかといわれているんじやよ。じじつ『見語大鵬選』では土佐守が

奸物伝蔵をやつつけた英雄として描かれているからね」

「で、その浅尾の蛇責めだが、今回の件と『見語大鵬選』とはどんな関係になるんだろう？」

理吉は巷間稗史より、辰巳屋の件のほうに 관심があるらしい。

「だから、どうも下手人は『見語大鵬選』を手本にして、同じ方法で殺しをしたんじやないだろうか」

「えつ。そんな馬鹿な。酔狂なやつだな。物語をまねするなんて。どんな御利益があるんだ」

「それはわからぬ。じやが、もし物語をなぞつたのなら、続きがあるかも……」

桂庵は物思いに沈む。

そこへ助吉が顔を出した。

「あにい！」

「いや、ご苦労だった。ゆっくり休んでくれ。もう今日はかえつていいぞ」

理吉は機嫌がよく、助吉に言つた。

「いえ、あにい……また殺しです」

「え？」

「卯辰山です」

「すぐ、いこう」

二人は桂庵のぽかん開いた口を見ずに、外へ走り出た。

「最初に見つけたのは？」

「卯辰山の観山楼の料亭の女将です」

助吉は小柄の足の太い女を連れてきた。

三白眼の細い目で理吉を見上げた。

「はい。あれは、朝方のことです。私ども観山楼から北に見える雪を頂いた医王山の頂を見ながら洗いものを干しておりますと、鳥の声が妙にうるさいのでござります。そちらの方を見ると、こここの楼上から手前のこんもりした甲の形をした山が見えるのですが、その頂の所に数十羽の鳥が群れておりました。そこには大きな松の木が生えていたのを知つておりましたから、なにか鳥の獲物になるようなものがいるのかなあと思つて見ておりますと、どうも大きな動物の死骸の肉を

啄んでいるようなのです。私は急いで部屋の遠眼鏡を取りに行きました。で、みてみると、時々鳥の嘴に肉片が躍るように筆り取られているのが見えます。

珍しいこともあるもんだと思つてしばらく見ておりまると、急に風が鳴つて木の枝が一瞬間揺れて、鳥たちが獲物から離れたのでございます。それで獲物の正体がはつきり見えました。木に吊されておりましたのは両手両足を縛られ、鮪の刺身みたいになつた裸の人で、ええ、それでもう怖くなつてご奉行所にお知らせした次第です

向かいの山にきた。ここは人家もない寂れた所だ。

大きな松の影に、木から下ろされた死体があつた。汚物に集る蠅のように、いつのまにか見物人が集り始めていた。

「理吉さん、こつちです」

助吉は菰をめくつてみせた。

全身を嘴で啄み、刺された痕がある無残な死骸である。

理吉は、はつとして男の胸をみた。

この男にも豆を五つ並べたような柄餅色の痣があつたのだ。さらに、「よく見てくれ、この疵は鳥のせいじやねえな」

理吉は、胸から腹にかけた数十条の刃物の長い切り傷を示した。

そして屈んで死人の躰を引っ繩り返して、

背中にも同様な縄目のような切り疵を確認した。

「ひどく、切れ味の悪い刃物で切りやがつたもんだ」

助吉は感心したよう言つた。

「いや、これは刃物は刃物でも鋸だよ」

「鋸引きですかい。こりやひでえ」

「鳥だつて、生きている人間が裸で吊されていたつて、そう簡単に餌だとは思わないさね。あらかじめ下ごしらえされていたんだよ」

「膚に疵を付け、血だらけの裸体を木に吊したんですか。鳥の餌にするために」

「ふん、鳥だけじやないよ。鳶もいる」

理吉は鳥にくじりとられて暗渠となつた眼窩にそつと菰をかぶせた。

「はつきりしたことはわからねえが、吊されてから相当長い間いたぶられた様子だな」

「生きたまま、鳥に目玉を食べられた」

助吉はぶるつと躰を揺すつた。

「ひよつとして、これは辰巳屋の蛇の件となにかつたがりますかねえ」

助吉はこわごわ理吉の目をのぞき込んだ。

「わからねえ。残虐非道なことでは似ていなくもねえな。ただ癌が同じだ」

「癌？」

「見ねえ」

理吉は跪いて菰を下の方からめくって、助吉に死

人の脇腹の癌を見せた。

「これが、辰巳屋のお内儀にも？」

「そうだ。おめえ気づかなかつたか」

「へえ、情けないことで、蛇ばかり気になつてしまつて」

「しあうがねえなあ、おつと」

杉田与力がめずらしく後ろに立つていた。

「（）苦勞：」

これも珍しくねぎらいの言葉をかけてくる。

（笑えるぜ、いつもさぼつてばかりな癖に…）

理吉は笑おうとしたが、笑えなかつた。

長年の岡つ引きの勘というのであるうか、これから

次々と起ころるであろう、おぞましい死人の顔が次から次へと浮かんできてしまつたからだ。

格天井に高麗縁、几帳を繞らせて一段高い畳に着

崩した直衣に烏帽子を被つた土佐守直躬と女たちが窓いでいた。直躬は隠居してずいぶんになるが、加賀藩においてはいまだ隠然たる力をもつていた。日々

医心法が教える房中術を駆使して、接して漏らさず、若い女の生き血を吸いつつ乱脈無頼な生活を送つていた。

「殿様、お耳を…」

隠居してもまだ「殿様」と家来からは呼ばせていた。直躬の世話係橘甚内はいつになく緊張していた。

几帳の周りには半裸の七人の女がいた。毎日入れ替わる。

百姓の娘、商家の娘、紅毛人の娘、黒人の娘、武家の娘：みなどこが殿様に好かれたものかさっぱりと共通点がなかつた。殿様の好みというものは甚内には想像を超えていた。

「来るな。おまえの顔を見ると面白しろうない。下がれ、下がれ」

直躬は白髪銀髭。青白い顔に驚くほど艶やかな紅い唇が真一文字に引かれている。来年喜寿を迎えるとはとうてい思えない肌の艶だ。

「うるさいわ、さがれさがれ、さがれというに…」

「辰巳屋のおみつと甚五郎が死にました。先ほど奉行

所から知らせが…」

「なに。死んだか。それがどうした」

「殿様。ただ死んだのではございません。惨たらしい

死に様でして、蛇責め、鋸引きで吊されて殺されたのでございます。これはなにものかの復讐、見せしめかと推察いたします」

「まさか伝蔵の係累のもの：はて。みな処断したはず、

一人も生きてはいまいが。のう甚内」

「はい。いえ：まだ家来筋のものが生きている者があるかもしません」

「馬鹿な。今頃になつて。なぜ？」

「身辺は厳重にしたほうが、よいかと。ここは人払いをして…警護の者を」

突然一文字の唇が歪んだ。

「いやじや、いやじや、いやじやなあ、のう、みんなの

衆」

義眼のような目は決して笑わない。

直躬が女たちに目配せすると、七人の巫女は声を揃えて唄いだした。

「いやじや、いやじや、いやでござります、今夜も殿様と一緒にやすみとうござります。ほほほほほ。いやじや、いやじや、いやでござります、ほほほほほ。

今夜も殿様と一緒にやすみとうござります」

女たちは肌の色も顔かたちもばらばらだったが、ひといろ一色の声で合唱し、踊り出した。

女たちの髪には、菅原道真の紋所を模した金の簪で、女たちの乳の下には、みな朧餅色の痣があつた。

「下がれ！」

いきなり雷のような声が辺りに響き渡った。凍てついた目は陥しさを増していた。

「ははあ

甚内はそのまま石のようにうずくまつた。

甚内は座敷から外へ出た。

庭にある三間ほどの風流な太鼓橋を渡り、廊下を通り、大広間へと進んだ。ここはもと大槻伝蔵の屋敷であつたが、失脚後没収され直躬の隠居所になつた。屋敷は「喜見楼」と呼ばれた。

犀川橋近くの八町四方の地所を占め、築山は各地の景勝地から取り寄せた銘木、珍木を植え、泉水には犀川の自然の水を堰入れ、また多くの美女たちを呼び寄せ、夜ごとの宴会、酒色の愉しみに耽つていた。まことに奢り栄える直躬のこの屋敷は須弥山の頂、忉利天にあるという帝釈天の城、喜見楼といつてもよいで

あろう。それをそのまま屋敷の名前にしたのである。

またこの建物を用心深い甚内の発意で絡繰り屋敷に

改造した。

突き当たりの襖を開けると、三十畳ほどの広間に出了た。

天井には自然木そのままの梁がのたくつている。

この場所は建物の全階段三十一箇所のうちの七箇所の階段が集中している。甚内は少し立ち止まって、再び上へと進む。今まで相当な年寄りと見えた甚内の身

は軽く、いつのまにか腰もスッカリ伸びている。

ひよい、ひよいと螺旋階段を足早に上っていく。

鎧か幕府

の嚴命ではお城以外で四階以上の建物の建造は御法度のはずだが、この建物は地上六階、地下二階、各所に落とし穴となる廊下、階段の下の秘密部屋。隠し戸に隠し部屋が設えられていた。

地上六階の頂上にあるギヤマン造りの望楼に達した甚内は周囲を伺つた。

寒空の下、夜も更け、加賀金城の町の灯りも僅かとなつた。

犀川の黒々とした流れに雪が吸い込まれるように消えていく。

「まさか今頃になつて伝蔵の怨霊、いやいやいや、滅相もない。慥かにこの手で。いや待て：あれは：いざ

れにしてもわが殿に祟りなす輩に違いない。用心せねばなるまい」

甚内は太い眉の下、油断なく辺りを見回した。

鋸引きで殺された甚五郎は以前この「喜見樓」に入りしていた甚内直属の使用人、辰巳屋のおみつはかつて殿のお気に入りの女だったのをお下がりで甚内がもらい受け、辰巳屋に多額な金子で譲り渡した女。縁のある者が続けて酷たらしく殺されたとあつては油断がならぬ。

「夥しい数の蛇か、地下の生け簗のあれか？」

鋸

はて？ 誰か：内通者がいるかもしけぬな。それにしても殿のご機嫌を損ねてしまふた。なんとかせねば。そうじや。また杉に女を世話させよう。やつは昼行灯の与力だが、女を見る目は間違いない。おつとあれ、杉のやつじやねえか。まだあんなところをぶらついてやがる」

広小路から犀川大橋へつづく道に、ちらちら微かな火が動いていく。先ほど甚内と密談した杉田与力の煙管の火に違いない。甚内は物見台からぶら下がつた紫紺の房を引っ張つた。

「にいさん、あたいにも一服吸わしておくれよ。そし

たらあたいのも吸つていいよ」

夜鷹にしては上玉の、白い顔がぬつとあらわれた。

女はにこやかにしなだれかかり、懷にしつとりした掌を入れてくる。

与力は女の匂いに目を細めた。じつは酒よりも女のほうが好きなのである。飯の炊きあがるときのような女の体臭。雲間から出た寒月が女の胸元を照らす。肌が熟れた林檎のように色づく。

「この寒いのに、ご苦労さんなこつて、うん」

杉田が振り向く間に女の躰は五六歩先にある。

につこり。白魚のような手に杉田の巾着が握られている。

「ありがとお、おにいさん」

「おつと、見損なつちや、いけねえや」

帶の後ろに差した朱房十手が夜空に飛んだ。

「痛でえ、なにしやがるんだい、痛いじやないか。こ

の馬鹿」

「大人しくしろ、俺をだれだと思つてるんでえ」

与力は猿臂を伸して女の帶を掴まえた。

昼行灯とも言われているが、歴とした現役の与力なのだ。ぎょろりと目を剥いて巾着をもぎ取る。ぎりりと女の腕を締め上げる。猿は好物の柿の実のように巾

着を咥えると素早く縄を取り出した。

「なにしやがるんだい、放せ放せ放せ放せ、痛い痛い痛い、いやいやいや、このとんちき」

しかし女は縛られてしまうと、急に観念したものか、不思議に黙り込んでしまった。縄を引っ張ると、柳の小道を大人しく曳かれていく。女の髪だけが恨めしそうに風に吹かれて地面におどろおどろしい影を落としていた。

(二) いつは、ここらでみたこともねえ女だが、たいした玉だあ。ちょいとしたためつけもんかもしけねえぜ) 懐かに、与力が常日頃相手にしている女郎衆とどこか種類が違うと思わせる美形であった。

杉田与力は、女を喜見楼の拷問部屋へ引っ張つていた。

「ふふふ、『水攻め』でいくか、そうそう久しぶりに『糞尿問い合わせ』にするか、『石問い合わせ』、『吊るし責め』、『火責め』もいいなあ」

与力は、こうして捕らえてきた若い女を理由もなく拷問することをひそかな愉しみとしていた。同僚の同心たちもここによく訪れ、見物した。連れられてくる女(なぜかほとんどまつたく女ばかりなのだが)なかには全くの無辜のもの、ほとんど濡れ衣、言いがかりで

罪となつたものが多かつたが、同心達は見て見ぬふりしていた。なぜかというと、杉田にはここ喜見楼主人の覚えもめでたいし、またたんまり同心たちに袖の下を弾むからなのであつた。

同心たちも日頃の凄まじき宮仕えの腹の底に溜まつた鬱憤を晴らしてくれる杉田の所行を軽蔑しながらも、同じく愉しんでいたと言つてよい。

杉田の言う「糞尿問い」というのは水責めの一種で、水の代わりに糞尿を咎人の鼻口へ垂らす。咎人は悪臭も酷いところへ、呑んではたまらぬから、息もせず耐えるが、もちろん長くは我慢できない。そのうちしきたま糞尿を呑み込み悶絶するというものである。これは責めて罪状を白状させるというよりは、たんに虐めるという趣のものなのである。

通い慣れた「喜見樓」の拷問部屋につくと、早速杉田は女を牢の柱に縛り付けると、番太に命じて、糞尿桶を持つてこさせた。苦むした桶にはナミナミと新鮮な糞尿が湛えられている。杉田は青々とした月代へ手をやつて、鬚を弄びながら桶と縛られた女とを等分に見た。目はいまや白銀の皿のように輝きを増している。

「うるせえや、いま仕事中だ、けけけけけけ」

黒い影がすこし動いたと思つたと同時に、杉田の持つた柄杓が跳ね上がつた。糞尿はしこたま杉田の顔にかかつた。

「ぐえ、なにしやがるんだい、ペツ、ペツ、うううえー」

杉田の鬚から顔にかけてべつとり糞尿が貼り付き、急いで喋ろうとする。それが生き物のように口へとなだれこむ。鉤爪が杉田を床へねじ伏せる。地の底から獄卒に責められる悲鳴があがつた。

耳元で声がした。

「急げ、上玉の女を手配しろ。すぐにだ」「おんな」

杉田はまなじりが裂けんばかりに目を吊り上げる。女を見た。女は愕いたことにうつすら笑みを浮かべていた。

「どうした大人しいなあ、さつきの元気はどうした？」

甚内は、まだギヤマンの望楼にいた。

「甚内様、きつと杉に申しつけました」

鉤爪の左内が蹲踞してい

「それで、どうだと」

「はつ、ちようどまた女を懲らしめようとしていたところでございましたて、ははは、反対にちと懲らしめてやりました」

「ははは、で、女は」

「それが、佳い女のように、殿様好みの利発そうな」「すぐに連れて参れ、すぐに」

「ははつ」

「いや、待て」

「は？」

「あの頃は楽しかったのう」

「はあ…」

「あの頃よ」

「はい。あのころは、皆、若いうございました。甚内

様も、私も」

「あれは、殿様が筆頭家老となつたころか。藩政のすべてをお一人で握つておつたといつてもよい。屋敷には殿様の好みで、一芸に秀てる変わり者たちが集められておつた。そなたも覚えておろう」

「はい。そうそう漆黒の肌の火を呑む小人に、軒まで届く大男、飛ぶ鳥を落とす修驗者、獣の物まね上手な酔払い、大食いの瘦せ男、くノ一の遊君に、無口な嘶家。屁こきの琵琶法師、髑髏持つ高野聖。そういう大兵肥満の相撲取りと禿げた紅毛人の取り組みは面白うございましたな。愉しゅうございました。貴賤上下別なく、なにか面白そなうな才ある者をいつも止させて昼夜別なく酒池肉林。喧嘩あり、笑いあり、涙あり、酒あり、美女あり、愉しゅうございました。まるで水滸伝の梁山泊のようでございましたな」

「そうさなあ、左内よ。伝蔵を覚えておるか」

「もちろん、忘れるはずがございません」

「うむ、殿様も伝蔵に対しては悪逆の限りを尽くし、恨まれたとしても仕方のないことよの」

「いかにも、左様、ですから、このようにお屋敷に仕掛けからくりをしてお守り致しております」

「しかし伝蔵は殿の不思議な才を愛する趣味でもつて田舎から呼び寄せ、奉行、代官、側用人と出世させた者。もちろん出世させた後で生き血を搾り取ろうとい

う殿一流のお考え。百姓の小倅であつたのが、身分不相応よ」

「伝蔵の美貌と利発。計数に明るい処をたいそう愛し

ておられましたな。いやいや、あれは菊花の契りと

も「うむ、そういう噂もあつたな」

「殿はあるの伝蔵のおちよぼ口が可愛くて、頭のよいのを、たいそう愛された」

「殿様は阿呆がお嫌いだったからな。しかし、殿の方的な片思いじやつたよ」

「いかにも、伝蔵は頭はいいが……」

「本性は百姓、普通の善良な男」

「異能を好む殿とは、もともとそりがあわなかつ

た」

「左様でござります」

「そしてあの騒動が起つた」

「伝蔵にとつては自然な感情でありましよう。百姓の

出自であるから同情したではありませんか」

「しかし、殿は許せなかつた。いや許さなかつた」

（二）で彼らが言う騒動というのはこうである。

『見語大鵬選』と少々内容が異なる一本『世人不知

物語』から大略を引用してみよう。

事件の発端は加賀の大凶作である。

百姓どもは皆背に腹は代えられず、年貢の免除を大庄屋与三左衛門に訴え出た。しかし与三左衛門は百姓

の難儀にも知らぬ顔、改作奉行の吉田宅右衛門と示合させていつこうに年貢を宥免しない。あろうことかえつて厳しく取り立てる始末。百姓どもが怒るのも無理はない。改作奉行と大庄屋がぐるだとわかり、百姓たちは思い切つた行動に打つて出た。直訴だ。それがあろうことか筆頭家老の土佐守直躬にだ。直躬の外出の折りをみて、直訴しようと待つていた。直躬の乗る駕籠はお城より下屋敷への帰り道で、百姓たち二十人ばかりに取り囲まれた。直躬はてつきり襲われるのだと思つた。百姓どもは直訴状の願書を駕籠へ投げ入れた。剛胆な直躬は願書を一読して大笑した。そして百姓どもに向かい、

（一）お前たちの願いの趣旨はもつともである。追々沙汰するから、手荒なことをするでないぞ」と申し渡して屋敷に帰り、すぐに吉田宅右衛門を呼び出し、先の願書を見せ、ほかの家老どもにこのような直訴状が渡つたなら、『役人の不届きである』と誣議が及ぶだろう。ことによるとその方困つたことになるぞ。少しぐらいゆるめてやれ。ことの起らぬようよしなに処置しろ」と申しつけた。

宅右衛門は、「恐れ入ります」と神妙に返事をしたもの、百姓たちへの怒りが収まらず、それからすぐ

に大庄屋与三左衛門のところへいって、この願書を見せて相談する。与三左衛門は元来不敵の曲者で、自身の権威に任せて、「さて、憎き百姓の奴らめ、何程のことがある。この件は拙者にお任せあれ。宅右衛門様、よろしく取り計らいしよう」とこともなげに請け合う。

与三左衛門は直訴した百姓どもを呼び寄せ、目を怒らし、「直訴」というものは天下のご禁制であることは知つていよう。ことにわしは庄屋であるから不満があれば何回でも願い出るべきなのに、一回の願いが取り上げられぬからと言つて、あろうことが筆頭家老に直訴に及ぶとは不届千万。よつて厳しく詮議する」と言ひ渡し、直訴に参加した二十人の百姓どもみな与三左

衛門の居宅の裏長屋に押し込めた。そうしてもちろん家へ帰さない。ほかの百姓はみな驚いてさまざまに訴えるけれども、与三左衛門は少しも聞き入れない。その上見せしめのためといつて食事もはかばかしく与えず、数日監禁する。村々の百姓どもは怒り騒いだ。その夜百姓どもは数百人の徒党を組み監禁されている者を助けようと、与三左衛門宅へどつと押し寄せた。手に手に鋤、鍬、斧、鉄など引き投げ、引き投げ無二無三に門口に殺到し打ち壊し、家内にどつと押し入

る。四方八方の戸障子に至るまで、片端より打ち壊していく。「与三左衛門はどこじや。どこにおる? やつを逃がすな。打ち殺せ」と声々に呼ばわつて尋ねた。与三左衛門をはじめ家内の者はたいそううろたえ騒いで、ほうほうのていで逃げ散つた。誰もいなくなつた家を一揆のものは散々に打ち壊して、監禁されていた二十人の者どもを救い出して、介抱の者をつけて家々に帰した。それからまた家財道具まで残らず打ち壊した。

百姓どもは大声を上げ、嬉しや嬉し日頃の恨みは晴れたりと言い合い、どつと笑う。

このようにして与三左衛門は命からがら逃げ出して、役所へことの次第を訴えた。

役人は吟味の上、さつそく与三左衛門を案内者として村へとつて返す。村々へ捕手の役人が大勢向かつたので、百姓どもは、「与三左衛門がくるぞ」とここかしこから五十人、三十人ずつかたまり出てきた。「与三左衛門を逃がすな」と言うより早く、追いかけ取り巻き、ついに与三左衛門を打ち殺してしまつた。

捕手の者どもはこれを見て、「不届き千万なる百姓ども、一人もあまさず捕らえろ」と向かつたけれども、数の多い百姓どもはものともせず、てんでの得物で捕

手に打つて掛かり、散々に打ち薙ぎ伏せるので、捕手どもも打ち負けて武具を取られ疵きずを受けて、さんざんな躰からで逃げ帰った。

これが國中の大騒動となつた發端である。

その後百姓どもが一揆を起こし御城に押し寄せるとの噂が立ち、御城下の男女はたいそう驚き、今にも合戦が始まると、家財道具を運び出し、巷ちまたに彷徨さまよつていた。人々は赤子を抱き老人の手を引いて、東西に走り、南北に逃げ、もつてのほかの大騒動となつたのである。

藩の諸士はみな登城して、にわかに評定が始まつた。

吉徳公が在国であつたから、さつそく殿の御出座があつて評定が始まつた。本多阿波守が申し上げること

には、「そもそも当地の人気ははなはだ強勇であつて、ともすれば百姓は一揆を起こしたことです。京都將軍の御代には富樫氏とがじろうが代々國主であつたが、そのころの富樫次郎政親は武勇の聞こえ高く、將軍家三好松永みよしまつながが宗論じゅうろんの門徒等、本願寺・高田の家宗の浅深についてのものの大将として、國中の一揆を糾合し國主富樫の城

に押し寄せた。富樫はよく戦つたが、小勢であつたから、ついに打ち負け、一族三十餘人同時に自害し、ついに家が絶えてしまつた。

それから一揆が國中に広がり、近国までも波及していつたのを、佐久間玄蕃さくまげんぱが知勇を振るつて、ようやく鎮めたことである。しかしややもすれば百姓一揆が起り、度々の難儀に及んだ。

しかしながらご当家の先祖前田利家公、この國を統治なさつてからは、今に至るまでこのようなことはなかつた。この度の百姓どもの一揆は等閑にはできない。人数を差し向けて百姓を召し捕り、お仕置きを仰せつけられるべきです」と申し上げれば、大槻伝藏これを聞いて、

「誠に『蟻の一穴より堤提は崩れる』と昔から言いますけれども、それは乱世の時分のことです。この度の騒動は下の訴えを上へ通じないことに百姓が憤つて起こしたことで、強欲な大庄屋を恨みてのことです。まったくお上に歯向かつてのことはありません。また捕手に手向かいしましたのは、大庄屋がついていたからです。いままた人数を差し向け、百姓を召し捕らんとすれば、土民たちなどが何万人も集まつてもすこしも恐れることはなけれども、相手も必死なつて手向

かいすれば、こちらも死人も多く出ましよう。それでは国政の妨げとなります。それよりも不埒な奉行、役人を戒めなされば、「揆は自然と静かになりましよう」と申し上げると、元來勇猛短慮の吉徳公でありますから、伝藏の言葉をご採用ならず、

「その方の考えは手ぬるい。國主より差し向けた役人に手向かいしたは反逆罪である。すぐに召し捕りて一々首を並べなければ、國主の威光が薄いのに似ている。早々に騎馬武者を差し向け、片端より百姓を踏み殺し、それで手に余るならば、飛び道具で皆殺しにせよ」とたいそうお怒りになる。

その時前田土佐守直躬が進み出て、与三左衛門、宅右衛門と結んで暴利を貪った張本人であるにも関わらず、恥ずかしげもなく、「わたくしがときが烏滸おこがましいとは存じますが、申し上げます。これくらいでご人数を差し向けられることはいかがでございましょう。まず暫く差し控えられるのがよいでしょう。でもこのまま関知しないというのも、君のご威光が薄いとみられます。でありますから、拙者一人が百姓どものところへ参りまして、善悪の詮議を致しましよう」と申し上げる。

同じことでもお気に入りの土佐守が申し上げると、

吉徳公は機嫌が直り、すぐにご採用なされて、「方に申しつけるから。良きようにはからえ」と仰せられて、御殿の奥深くにお帰りになつた。これで評議の大勢の諸士はそれぞれ退出した。伝藏は頬もしげな眼差しで直躬を見ていた。

直躬は仰せを受け、ほくそ笑み帰つて着物を麻のものに替え、家来の若党二人と草履取りひとりを伴つて村方へ急いだ。

一揆の百姓たちは御城から討手が来るという噂があつたので、「とても逃れられない命、ひと働きして、侍どもを呆れさせよう」と物持ちの百姓は、先祖代々から伝えられた具足、鎧、長刀などを持ちだしてきて、今や遅しと討手の到着するのを待つて。そこへ前田土佐守直躬は供人二三人を連れるだけで、日常の平服で現れたのである。直躬が百姓どもに向かつて言う、「お前たちの腹の立つ事情はよく分かる。まずまず静かにしてわたしの考えを謹んで聞いてくれないか」ともの柔らかに言うので、百姓どもはこれを聞いて、拍子抜けして歎向かう氣もなくなつてしまつた。みな「はつ」と平伏した。

直躬がまた言うには、

「汝らの願いの趣旨はわたしが聞き届けた上で、年貢

宥免の沙汰も申しつけよう。下役人並びに庄屋の処置

が悪かつたから、このような騒動になつた。よつてお前どもの願いの通り役人などをきつと処罰しよう。しかしその方たちは一旦お上に対して手向かいした以上、取り調べのため入牢させないわけにはいかない。そうでなければお上のご政道がないようである。だけれども命に関してはこの直躬が責任を持とう。いざれが首謀者であるともいえないから、みなでくじを引いてくれないか。一ヶ村から三人ずつ出しなさい」

百姓どもも直躬の道理のある言葉に従い、「なるほどそのようにすればまるく收まるのか」と納得して、一ヶ村より三人宛、都合八ヶ村で二十四人、くじで選び出した。

直躬は、「これは一応大法を犯した咎人であるから」と言つて、「縄を打て」と言つて、二十四人をこ

とごとく縛り上げて、それぞの村のものに縄を持たせて、直躬は手も汚さずして、二十四人を生け捕りにして、悠悠と御城に立ち返つた。それから彼の二十四人は残らず牢に入れられた。

また改作奉行の宅右衛門は追放され、その手代三人にも暇が出された。でもこれは表向きであり、内情は

直躬が金子を渡して、人しれず匿かくまつていたというこ

とである。

この二十四人の百姓どもは、法度の徒党を結び、そのうえ役人に歯向かい、大庄屋を打ち殺した張本人とすることで、残らず死罪となつた。

村の面々はたいそう驚き悔しがつたが、役人もお咎めを受けていることだから、文句も言えず、そのまま済んでしまつたが、腹が納まらなかつたのは、伝蔵である。事あるごとに直躬に逆らい、果ては直躬を除こうと画策したのである。しかし逆に直躬の策謀により、伝蔵が醜聞に塗れて殺された。直躬の怒りは凄まじく

伝蔵の親族、郎党皆殺しにされたのである。当時隠れて読まれた『世人不知物語』は真偽はともかくこのよう伝えている。

さて、閑話休題。

話を直躬と甚内の会話に戻そう。

「しかし、一度いい思いをした者が、落ち目となるは、こたえるものでは」

「うむ」

「まして所払いのうえ極秘裏に五箇山で斬首」

「うむ」

「親族はすべて始末したのか」

「めぼしき者はことごとく」

「めぼしき者？ 漏れはないのか、今頃になつて」

女掏摸はすぐに、喜見樓の住人となつた。

幾人の女達の手によつて、すぐさま野暮つたい夜鷹の着物から、うつて変わって美々しい振袖を着せられ、たちまちのうちに化粧を施されると見違えるような麗人が出現した。殿の着替え係のひとりが経血のため里帰りしていたので、その代わりにこの女掏摸が出た。その夜直躬は新しい女に気づくと、着物の襟首を剥いて、乳房の下を見た。

「まだ、ないな。名はなんと申す？」  
「おみないと申します。以後お見知りおき、お頼み申します。いいえ、もうお会いできなきかも知れません」  
「ほほう、どうして？」

直躬は興味を覚え、女の下顎に手をかけ、顔を上げさせた。なんともいえぬ色香を放つてゐる。女も見上げる。それはよそ目には殿の拝謁を得て、しかもお言葉まで頂いた光栄のあまりに身を焦がす喜びの表情とも見えたが、青みを帯びた目は憤怒の氣を放つていた。

「親の敵！」

おみなはいきなり懐剣を取り出した。

直躬の周りを取り囲んでいた小袴姿の女たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

直躬は几帳の後ろに隠れ、なぜかまた、すぐ飛び出してきた。  
（してやつたり！）

（よほど周章てたのだろう。怯えきつた顔をしている。思ひの外軽く、ふすっと屁をひるような音がして、突き刺さつた。）

懐剣は深々と、直躬の胸に突き立つた。  
上物の絹の着物の金糸銀糸から新たな朱色の模様が広がり出し、裂け目からシユルシユルと音が出た。

同時にみるみるおみなの顔が紅潮する。

いや、真つ赤な返り血をしとどに浴びてゐるのだ。  
「思い知れ！」

修羅のような血相で女は絶叫し、ぎりぎりと東も拳も通れと躰ごと押しつける。たまらず直躬は海老反りなり、後ろの几帳の裳裾の中へどうと倒れ込んだ。おみなは敏捷に跳び込んで跨がり引き抜く。またもや噴出する血を浴びながら今度は喉仏にトドメの一閃。直躬は空を掴んで悶絶した。

（ははは、思い知ったが、はあ）

（はて？ 後ろから、冷たい視線を感じるのは、なに？ 直躬は殺したはず、いまここに…）

「何を騒いでおる？」ちと五月蠅いわ。勝ち気な女は嫌いではないがの、ふふふふ。

振り向くと直躬が再び豪華な衣装を纏い悠然と立つ

ていた。  
この真冬に檜扇を使い、薄笑いさえ浮かべている。

「おのれ、影武者だつたか」

おみなは再び躍りかかつた。が、横合いから、いきなり鋼鉄の鉤爪に弾き返された。

「ううう、」

おみなは部屋の隅に吹っ飛んだ。

「殿様、あちらへ」

甚内が現れ、床の間の掛け軸を捲ると、直躬と一緒に消えた。

「待て」

おみなは必死に追いすがる。

いきなり鉤爪がおみなの脳天を掠めた。

ぶうううん。

鋼鉄の焼ける臭いがした。

ぶうううん。

今度はおみなの青白い切れ長の目に迫つた。退つた

拍子に、几帳台の死骸に躓いた。ぶううん、ガシャヤ

床に叩きつけた鉤爪は死骸の白髪頭を打ち碎く。脳漿が飛び、足袋が滑る。

おみなは思わず尻餅をつく。

鉤爪は大男なのに、猫のように身が軽いのだ。まるで黒豹だ。

もう足もとに来た。いまや腥い息まで感じられる。激しい動きにおみなの髪は崩れ、翠なす黒髪が背中に扇のように広がつた。にらみ返し、一瞬翻つて、後ろへ。黒豹は猿臂を伸した。

鉤爪に長い髪が搦め捕られおみなはもんどう打つて倒れ、三尺ばかり引き戻された。

「うわわわわわっ」

脳天を串刺しにされたような痛みが駆け抜けた。

鉤爪は髪の毛をぎりぎりと巻き取つて、とうとう懷

剣をもぎ取つてしまつた。

鉄の爪がおみなの首を撫で回している。

「いい女だが、やむを得まい」

「待て！」

突然くぐもつた男の声が響いた。

いつの間にか小柄な男が飘然と立つていた。金色の撥を手に、背中に琵琶を担いでいる。

「なに？」 貴様、何者？」

かしら

の

面

に、

毛縁襪

けべりようは

袴

あこ

顎

が

カタカタ

動く。

舞

樂の蘭陵王の面のようだ。

「出あえ出あえ、者共！」

左内は左右を見回し、呼ばわつた。

四方の襖が開け放たれて、たちまち五人の侍が飛び出してきた。

手に手に得物をもつてゐる。取り囲んで斬りかかるうした瞬間、面の男は、手を小さく振つて何かを投げた。左内の眉間に血煙が上がつた。撥が眉間に突き刺さつたのだ。

次に背中の琵琶を横抱きにすると、転手が短い箭となつて次々と飛び出した。侍は次々と薙ぎ倒されていく。面の男は顔を押さえて呻く左内に躍りかかり、女を奪つた。

「さあ、やつを追うのだ」

「あなたは誰？」

「いまは、いえぬ」

「まあ……」

「さあ、早く」

二人は先ほど、直躬が入った掛け軸の後ろへ跳び込んだ。

やはり螺旋階段が上へと続いている。

途中途中に明かりが灯つてゐる。上まで登り切ると行き止まりになつてゐる。

壁の菱形の取つ手を回すと、壁ががらがらと動いた。「こつちだ」さらに上へ階段が続いてゐる。二人は躊躇せず、跳び込んでいく。

突き当たりの襖を開けると、閑静な茶室に出た。

四畳半ほどの広さである。

壁面はすべて群青色である。

違ひ棚に九谷焼の佳麗な皿が飾られている。

障子の前の敷物が僅かに乱れている。

「ここから逃げたな。ここだ」

「気をつけて……」

さつと障子を開けた。おみなは思わず首をすくめ、

怪奇な面の男の手を思わず握つた。

外には五尺ほどの巨大な戸室石の井戸があつた。

その上には櫓があり、一際大きな釣瓶が揺れていった。

常は水をくみ上げるものだが、非常時には下へ降りる道具ともなるものと見える。

「さあ、掴まりなさい」

小柄男は驚くべき怪力とみえて、おみんなの腰を軽々

と抱くと、釣瓶の桶に乗り、縄を調練して、しづしずと下へ降りていった。途中背中の琵琶がなにかに触れとボロロンと音を立てるのが不気味に聞こえる。

「おみなは思つた。

下にはこの世ならぬ化け物が棲んでするのではない。もしかしたらこの面の男に騙されていて、餌食になるのではないか。ぞくぞくと冷える井戸の暗闇の中で、気丈なおみなも、もう震えが止まらなかつた。下に着いた。

水は膝までしかなく、どこからか冷たい風が吹いてくる。外へと続いているらしい。

「こつちだ」

二人は駆けた。

駆け落ちの男女のように急ぎ足で：情死する道行の

ようすにおみなのは足袋は、冷たいという感覚さえなく

なつてしまつた。

隧道の出口に近いのか、暗闇の底に、ぼんやりと光

が見える。そこに豪奢な衣装の白髪の男が立っている。灯が点つた。はつきり見えた。直躬だ。

「おう、よくこれたな」

直躬はなにやら器械を弄つてゐる。

「これでいいかな？」

「はい」

隣に影のよう甚内が控えてゐる。

言いも終わらぬうちに、天井から鉄柵が降りてきて、二人と直躬の間を隔てた。しかも傲然と音が響き、滝のようすな冷たい水が上から落ちてきた。

二人はしつかりと手を結び合つたが、あつという間に洞窟の奥へと流されていった。そのまま激流に呑み込まれていたら、二人の命はなかつたろう。そこへ檻樓をまとつた屈強な怪人が現れた。

「おお、兄じや」

仮面の男はしつかりその手を握る。

怪人はおみなのは着物の襟首を摑まえ軽々と引き摺りあげる。

すばやく洞窟の窪みに躰を横たえる。

瀑布が奔流

となつて脇を流れていく。

「：ウエ、アガル。ハシゴ：」

怪人はあらぬ方を向いて訥々と喋る。

「わかつてるよ。兄じや、この女を頼む」

「ウウウ：」

犀川の河原である。

「さあ、お前たち、水が引いたら、片付けてこい。あいつらももう生きてはいまい」

「死骸はいかがいたしましょう。殿の影武者は？」

「そこらに捨てておけ」

「はつ。杉に片付けさせましょう」

「茶会の支度は出来ておろうな」

「はい。客人はもう参つております」

「うむ」

直躬は機嫌良く頷いた。

鯿おこしの雷が轟き、丸雪が降ってきた。  
しばらくして、鯉節の削りくずのような牡丹雪があらわれた。

「今夜は積もるぜ」

盛大に降り続ける雪を仰ぎながら理吉が言った。

犀川沿いの上菊橋近くの柳の木の袂に、しん公の蕎麦の屋台が出る。

理吉はここの一連だ。

「そうですな、もうちょっと中にはいりなさいって。

旦那、お役目ながら毎晩氣の毒なこつで」

しん公は皺だらけの黒い顔に笑みを含ませて、差し

招いた。

「気の毒つてのは、ちと上から目線じやないか。まあ、仕方ねえ。手がかりはない。寒くなる。夜は更ける。一杯つけてくんな」

理吉はしん公の屋台に首を突っ込んだ。頭に汚い手ぬぐいを巻いている。どっちが蕎麦屋の主人か判然としない身なりである。理吉は姿を窓で市中を探索しているのである。

また、地響きとともに一際大きい雷鳴が轟いた。今度は近くに落ちたらしい。しん公は下流の方を心配そうに眺めた。

「今夜はいやに雷が鳴りますね。大雪かもしだせんわ。旦那、蕎麦の方はいいんですかい？ ちようどひろずが煮えたところで、温まりますぜ。こう寒くちや、やりきれません。あつしもいただきますから、どうぞ」

そういうてしん公は商売の熱燄をグビリと呑みだした。つづけて、

「あの、旦那、例の夜鷹の件どうなりました。よくあの時分あの夜鷹そこら商売してるんでね」

理吉はなんでもないかのように、しん公の手の銚子を奪うと、一口呷つた。

なめくじ

「あの夜鷹、蛯蠶長屋で会えたよ。あの晩なんにもみ

てねえ、ただそれだけの一点張りでね。後は黙つてじつと俺の顔ばかりみてるので往生したよ。愛嬌もねえ、夜鷹にしちやかわってる。まあ、さすがにお前の馴染みだけはあるな」

「理吉さん、色男だからでしょ。結局、関わりたくないんでしょ」

「関わりたくないなら、俺に知らせにくるなって。

まあ奉行所に呼ばれるとなると、いろいろ困ることもあるらしい」

「なにしろ、夜鷹ですかね。そりやあ、無駄足でしたね」

「いや、そうでもない。帰り際にやつとね」

「というと、なにがありましたか?」

「あの晩はひとりじやなかつたというんだ」

「夜鷹、ひとりじやないつて、客ですかい?」

「いや、違う、あの晩はもうひとり、年の頃なら二十五六、いやもつと上かも知れない、えらく上玉の流しの夜鷹がいたそうだ」

「へえ、小股の切れ上がつた美人というやつですかい。へへへ」

「相変わらず、いやらしいな」

「で、そいつが下手人?」

「まあ、どうかな、おんな一人ができる所行じやないしな。でもな、なにか知っているかもしけなえと思つてな」

「怪しいですね、その女」

「うん。そいで、助吉とその女を捜し回つているのよ」

「旦那、冷めますぜ。どうぞ」

「おう」

理吉がひろばを箸で割つて、中から銀杏を探しだして、口に放り込んだ。

「あの、ご存じですかい? ちまた うわさ 巷で噂になつてゐる」

「なんだい?」

「今回の殺し、伝蔵の怨霊の仕業だつて」

「わきやないだろ、伝蔵はもう二十年も前に死んでるんだぜ。怨霊といったつて幽霊だろ、幽霊に殺しが出来るかい。それもただの殺しじやない。手管が込み入つていて。そりや、桂庵先生の説だと、なんとかいう実録物をなぞつた殺しのようだ」

「ケンゴタイホウゼン」

「おめえ、よく知つてゐなあ」

「へえ」

そこへ助吉が突然理吉の背を叩いた。

「おどかすねえ！」

「てえへんでえ、大橋の下に死骸が、すぐきておくんなせえ！」

「何だ、身投げか、珍しくもねえ、明日の朝じやだめか」

「いいや、理吉さん、胸に、胸にあの癌があるので、杉田の旦那も出張つてますぜ」

「杉田の旦那が？」

珍しいじやないか

理吉はひろずの皿を素早く平らげると、

「じや、伝蔵の話、また後でな」

雪の降るなか理吉と助吉は競うように下流の犀川大橋の方へ駆けだした。

行灯で理吉は死骸を照らし見た。

「ひやう、顔がなえ。頭が粉々じやねえか。しかし、着ている着物はじょうもの……」

襟がはだけて剥き出しになつた乳の下が見えた。ま

たしても例の柄餅色の癌。

「助え、やつぱりだ、見ねえ、おい」

そのとき朱房の十手が理吉の肩を叩いた。

「てめえら、何しに来やがつた」

珍しく現場に杉田与力が立っていた。いつもにまして毒々しい目つきだ。そしてなにやら臭い。肥溜めの臭いがする。

理吉と杉田はにらみ合う。

「あの土手から落ちたんだよ。身投げだ。理吉。お前の迫つている一件じやない。自殺だわな。こっちで始末するから、引っ込んでろい。さあ、帰った、帰つた」

杉田与力の背後に、見慣れた役立たずの同心達の面々が見える。みないつもに似ず猛々しい殺氣を放っている。

杉田はあらぬ方を見ている。余裕綽々といつた躰だ。

死骸は歌舞伎役者か能役者が着る衣装のように派手で、血に染まつた金糸銀糸が雪明かりの中異様な光を放つてゐる。

理吉は、首筋に手を当て、それから着物の下へと手をすべらせた。

「冷え切つていねえ、まだ、ほんの……む、着物が濡れ

てねえ』

死骸の上には牡丹雪ぼたんせつがわざかにつもつているが、地面の側は濡れていない。

この死骸は、頭部はひどく痛んでいるが、足も手も気持ち悪いほどぬめぬめとしていて綺麗きれいだった。

(あの土手から落ちたにしちや、変だよな…)

飛び降りて自死しようとする人間でも、地面に落下する直前、無意識に自分をかばい、手足に傷を負うものである。しかも犀川大橋のたもとの土手から、下の河原までは八間はあるうというのに、この死骸は見事に頭だけが、潰れている。

(変だな：しかもこの手回し良さはなんだ)

理吉は下から杉田を睨ねめつけた。

「手向かうつもりか、お前えはただの岡つ引きだろう

が、あん、分をわきまえろ。わかっているよな」

杉田はやりと笑って、朱房の十手を肩に担いだ。

何か文句あるかという風である。

「もちろん、わかつておりやす、しかし、ごめんなす

つて、ちよいと確かめたいことがありまして…」

「無礼者、お前の代わりなど、いくらでもいるのだ。

さつさと帰りやがれ」

杉田は長脇差の尻で理吉を小突いた。

理吉はさつと立ち上がり、身構えた。

「やるか…、遠慮はいらねえ、やつちまつておくなさい」

後ろの同心たちは、それぞれに得物をとる。

「旦那方、やめて、やめ…」

理吉の前へ助吉が飛び出してきた。

それと同時に杉田が抜刀した。

理吉は助吉にぶつかつて投げ飛ばした。

助吉がそのまま立ちはだかっていたら、胴は半分になつていたろう。

殺氣を帯びた切つ先は理吉の動く先々へ正確に繰り出していく。

同心達も逃げ道を塞ぐように取り囲んだ。

一合、二合、三合、理吉の十手が白刃の切つ先を跳ね返す。

雪がひどく降ってきた。

理吉は河原を縦横、蜘蛛くも出、十文字に動き回るが防戦一方、躊躇よもめき尻餅しりもち、そこへ杉田の刀が突き刺して

くる。

間一髪躱す、杉田の刀が石に激しく当たつて 鉢の

部分から刀身が抜け落ちる。後ろからとびつき頭突き。

後頭部を痛打々々々もつれ倒れた。

杉田の腰の煙管が振り落とされる。

「うわっ…うごかねえ」

「やりやがった」

「まづいぞ」

「こりあ…ことだ」

「おれは、頼まれただけ」

「しれると…困る」

「しらないことだ。なあ…。さあ、いくぞいくぞ」

同心たちは口々に叫び、散つていった。

杉田は河原のごろた石を枕にしてのびていた。

枕はしどに血を吸っている。

雪は止み、雲間に月が出た。

「ん…とすると、こいつも一味か…」

杉田のはだけた乳の下に、色は悪いが例の柄餅色の

痣があつた。

「やつぱり」

「理吉さん、えらいことになつたなあ、どうしよう」「与力を殺しちや、打ち首だな」

「でも、杉田の旦那のほうが、先に刀を抜いて、あれ

じや、仕方ねえや」

「ああ、だがな、こつちはただの岡つ引き、分は悪い、さつきの仲間の同心たちも、ぐるだとすると、助からねえな」

「そんな…」

「そんなも、こんなもねえや、こうなつたら本当の

下手人を捕まえるだけだ」

「杉田は土佐守の隠居にせつせと出入りしていると

いう噂だつたな」

「へえ、なんやかんやいつてしょつ引いた女どもを

人身御供にしているという噂」

「じゃ、あすこしかないな、下手人の居所は」

見上げると、晴れ渡つた寒空に城のような立派な御

殿が屹立していた。

直躬の別荘の喜見楼である。

「おい、あそこの溝の口のところおかしくねえか」

みると石垣の中に穿たれた排水溝が壊れている。

「ありや、喜見樓のちようど下だよな」

「理吉さん、あんまりあそこにはちかよらねえほうが  
…」

「やばいっていうのかい、もう十分やばいよ：しかし  
あそこが一番怪しい」

そのとき助吉が一步踏み出して悲鳴をあげた。

みると雪の上に一本の黒い荒縄とみえた紐が、くね  
くねと動き出したのだ。

「化け物だよ…」

助吉は、飛び退いた。

「いや、化け物なんかいるもんかい：蛇だよ」

青虫に似た蛇はゆらゆら動いて、ぼちやりと川のな

かに落ちていった。

「探索してみようや…助吉ついてくるかい。いやなら  
俺一人でもいくが…」

「堪忍してくださいよお：おいてかねえでください。

やつぱあの蛇、辰巳屋にいた蛇とおんなじかねえ」

「だろうね、蛇なんて、この季節、どこにでもいるも  
んじやねえだろ」

「だとすると…」

「あやしい、あやしい、真っ黒けだ」

二人は、川の浅瀬を渡り、排水溝の石垣へとりつい  
て、そろそろりと、水の流れ出ている崩れ目から中に  
入った。

「洞窟のようだ。」

「柵があつて入れなくなつてるよ」

「そうだろうな。たやすく進入できたら、ことだもん。」

「万事休すか、助吉なんとかならねえか」

「理吉さん、ここに鎖が下がつてゐるが、引っ張つたら  
どうなるか、やつてもいいかな」

「これ以上先にすすめなかつたら終わりだな。とにかく  
くなんでもやつてみろや」

助吉は声に応じて、垂れた鎖をぐるぐると手繰りだ  
した。すると上でカチカチ音がして柵が微妙に動く気  
配がする。

「いいぞ、助吉、でもこんな簡単に入れるつて、なん  
かおかしくないか？」

「いろいろと立て込んでたのでしよう。いやいや意外  
に広いや…真つ暗だけど…」

入り口付近は雪明かりと月明かりとでほんのりと明

るいが、奥は漆黒の闇だ。

「ひやー、冷たい」

下には膝あたりまで水がある。

二人は奥を透かし見るようにした。

二三十間ほどの奥に、水底がボンヤリ光っている所

がある。

「奥はかなりありそうだな、いくぞ・」

理吉の声が洞窟内に不気味に響き渡つた。

「さつき、煙管拾つたら、火付くかい。明かりにしようや」

助吉は、煙管に火をつけた。

火のついた煙管の穂先がうつすら、足下を照らした。

水の底の窪みにちぎれた繩と巨大な釣瓶<sup>つるべ</sup>が引つかかっていた。

奥に入ると、天井に穴があつた。それは上へ続く空

氣穴になつてゐるようで、丸く区切られた空に黒々とした滑車<sup>かうしゃ</sup>が見えた。

「これじや、のぼれないな」

「まだ奥の方にも道がつづいてゐる…」

「うむ、行つてみよう」

上への急な階段が続く。小さな横穴もある。

空気穴を通り越して、しばらく登つていくと、地面

は乾いてきた。

それと同時に、かじかんでいて感覚を失つた脚に温

かみが戻ってきた。

地面からの温氣なのか、闇が蒸氣で靄つている。

「助、なんだか温かくないかい」

「不思議だ、気のせいかとも思つてたが、理吉さんもそう思うかい」

洞窟の壁に手を当てる時、温かい、まるで火山の地下にいるようだ。

「おつと、また蛇だ」

蛇がいる。いやに生きがよく撥ねるようすに盛んに階段を滑り降りてくる。

階段を登り切ると、広い空間がある。

三間ほどの升に、水が盛んに沸き出しているようなどころがある。

「手を浸してみろい」

助吉が恐る恐る手を入れると、

「熱いや、こりや温泉だ。温泉が湧き出でる」

十字に板を渡してあり、田んぼのようになつた生け簗がある。

「ここから蛇がでてきたようだぜ」

「いててて…噛みやがつたあ」

泥水の生け簗の中に手を浸した助吉が飛び上がつた。

「あぶねえ、この中は全部蛇だぜ、大丈夫よ、縞蛇だ。

「いつらは毒はねえ」

餌が来たかと思ったのだろうか、泥田の水面が生き物のように盛り上がり、ぬめぬめとした夥しい数の蛇たちが縛れ合いながら浮かび上がつた。

「しかし何だつて、こんなに蛇がいるんだ」

「おつと、戸があるぜ」

蛇の生け簗の突き当たりに、鐵の輪つかの扉がある。

「氣をつけろ」

理吉は輪つかを静かに引いた。

中は、牢屋だった。

石畳の両側に牢屋がしつられており、篝火が廊下にともされている。

右の牢の中には石積み、鋸<sup>(の)き</sup>、つるし繩、さまざまの責め道具が並んでいる。

「なるほど、ここは拷問部屋だな。例の卯辰山の鋸引きもここから…」

「かもな、おつと、人がいるらしい」

左の牢から、伎楼によくある脂粉<sup>しふん</sup>の香が漂ってきた。

「生きているようだが…女か」

みると牢屋の奥に、ぬめぬめとした半裸の女達が、肉饅頭<sup>(にくまんじゅう)</sup>のように折り重なつてゐる。死んでいるのではない。みな轟然<sup>(こうせん)</sup>と鼾<sup>(いびき)</sup>を擡<sup>(あたげ)</sup>いて、涎<sup>(よだれ)</sup>を垂らして、眠りこけてゐる。

「こいつら、なんですかねえ」

「薬漬けだな。ご隠居様の愛妾か」

「いやに、数が多いねえ、こりやあ」

「うむ、気が知れねえな」

「おつと、あぶねや、こちらに気がつきやがつた」

理吉たちは身を屈めた。

大柄の女の目がこちらを伺つてゐる。が、目は焦点はあつておらず、笑いかけるような微笑みを浮かべてゐる。が、「はつ」として、動き出した。するするこちらへ向かつてくる。

二人は思わず、あとずさつた。

「旦那、助けてくださいまし」

女は牢の格子にとりついた。

「こいつ正気じやねえよ。放つておいていきましょう」

理吉は女の目を見た。

「いや、正気だよ」

「名は、何という」

「おとよと申します。助けてくださいまし、はやく、

みんな、起きて、起きて、助けが来たよ」

大柄のおとよという女は、肉蒲団の山へ分け入り、叩き起こして回った。みな腕を上げたり、首を曲げたり、腰を伸ばしたりして、起き上がつてくる。

「この錠前なんとか、ならねえか。ちと、もよおした。そこらでおしつこするわ」

理吉は牢屋の反対の壁に向かって盛大に小用をする。

「ゆっくりしなさいって、理吉さん、ここは任せて

…」

「まげ」というと助吉は鬱の中から、細釘を出してきた。

助吉は錠前の穴に差し込むと、からからと、探りを入れると、カチリと音がして、錠前が外れた。

入ると、牢から女達がつぎつぎに出てきていた。

そのとき、どすう、鈍い音がした。

「あ、痛てえ…」

「死ねえ、けけけけ、死ねえ、けけけけ…」

笑い声がしたかと思うと、助吉が外れた錠前を持ったまま、がくんと、倒れた。

理吉が振り返ると、鬱をふりはなつた鬼のような形

相の杉田がいる。利き手に石を握っている。

小便はまだとまらない。

「死んだんじやないのか」

「おまえなんかに、殺されてたまるかあ…」

杉田は猿のまじらしく躍りかかってきた。

理吉はあつとという間に倒され、石が理吉の顔面に打ち下ろされようとしたとき、白い手が石を掠め取つた。

「あたしら、こいつに、ひどい目にあわされたんだあ」

あ

「そうだ、そうだ」

「思ひ知れ」

「この悪魔」

「蛆虫」

牢から女達がつぎつぎに出てきていた。

磯巾着のようないしやかな手が伸びてきて、

杉田の鼻を打ち、耳を引っ張り、頬を抓り、首を絞め、腰に、脚に、絡みついた。杉田は再び石を拾おうとするが、女達の触れた石はぬめぬめとして滑って握ることができない。しかも麝香のよう匂いがする。

女の躰はみな艶々としていて、まるで油を浴びたよう輝いていた。女達は何度も執拗に、脚や手で、杉田の顔面や躰を打ち据える。

「や、や、やめろ、恩を仇で返す気か…貴様らあ」

「恩? 何言つてやがる、僅かな落ち度に因縁をつけ、私らを嵌めて、売り飛ばし、生き血を啜つたくせに…よく言うわ」

地獄の獄卒に責められる罪人のようにな断末魔の叫びが、響き渡る。

杉田の躰は白い肉たちに、押し潰され、嬌声のな

か、たちまち見えなくなってしまった。

「ああ、びしょ濡れだわ、助え、大丈夫か」

「まあ、なんとか」

助吉は頭を撫でた。

「俺と一緒で、石頭でよかつたな。じゃ、本丸へいこ

う」

「旦那方、これはお礼だよ。恋しい女に送つてみな。

心底喜ぶ品物さ」

おどよは、小さな琥珀色の小瓶を差し出した。

「お礼つてまだ早いんじやないかい。それにしても、

なんだい、こりやあ」

「名は知らないけどね、南蛮渡来の油よ。これを肌に

塗ると、すべすべになるのよ」

「なるほど、おめえも綺麗だな。ぴかぴかしてらあ。

南蛮渡来か、じや、もらつとくよ」

理吉は小瓶を袂に入れた。

奥へときらに続く隧道があり、それが突き当たつたところで上に階段があるらしい。そこには松明が燃えていた。

「旦那方、こいつを道案内に連れて行くといいよ。こ

こは絡繆屋敷、どんな仕掛けがあるかわからないからね」

「罪滅ぼしだよ、さあ、命が惜しければ、言う通りにするんだよ」

「なに、岡つ引きの案内のために、この俺に役に立て

だとお

「いててて……」

大女が杉田の胸に馬乗りになり、首を絞めにかかった。

「苦しい、苦しい、わかつたわかつた、わかつたから、やめろつて」

女の下から這い出した杉田は、慄然とした表情で理吉をみた。顔は腫れ上がり、鬚は放たれて、目つきのあくどさといい血塗れな姿といい、まるで幽鬼のようである。

「じや、ついてこいや」

女の言うとおり、この館には様々な仕掛けがあつた。踏み込むと、あつという間に檜衾ひまきになる廊下、大石が落ちる仕掛けの天井に、落とし穴、蜘蛛の巣のようないい階段がいくつもあり、降りているのか、上つているのかわからなくなる。理吉たちだけではどうてい直躬たちのいる部屋へはたどり着けなかつたであろうと思われた。

いくつもの階段の中継地点の広間に出了た。  
「俺も役に立つだろう……みたか」

杉田は理吉と女達を振り返ると、得意そうに笑つた。  
魑魅魍魎ちみもりようの微笑みだ。

しかし次の瞬間笑みが凍り付いた。杉田の前に黒い巨体が立ちふさがっていたのだ。警護役の鉤爪かぎづめの男左内だつた。頭に鉢巻きのような包帯を巻いている。

「杉く、いい気なもんだ。この裏切り者め。裏切り者は死だ」

「いや、なに言つてるんだい。俺はこいつら連れて行つて、最後に殿様の前で一網打尽、皆殺しするつもりだつたんだよ。それでも裏切り者なのかい。えく。それにしても額の疵きずどうしたんだあ？」

「この野郎、どこまで腐つてゐるんだい、糞野郎！」

後ろの女達が騒ぎ出した。

「なんでもいいや。前から貴様は気にくわねえと思つていたんだ。ここで会つたがなんとかだ。理屈ばかりほざきやがつて、俺が裏切り者と決めたんだから。死ね。ひねり潰してやる」

鉤爪の男と杉田はにらみ合つた。

真剣勝負が始まつた。両者なかなか譲らない。小柄の杉田の踊るような身のこなしで、豪腕の鉤爪もなか

なか捕らえることができないのだ。

大女が理吉に耳打ちした。

「今だよ旦那、ここまで来れば、先は知れる。この広間の突き当たりが台盤所（台所）になつていて、そこを通つて、奥の階段を上れば、茶室にいける。そこに殿様がいるんだよ」

「うむ、しかし……」

前には鉤爪の男と杉田がやり合つてゐる。これをどうやつて切り抜けて、向こう側へいけるというのであろうか。

「ちよいとすまねえ、腰巻をかりるぜ」

理吉は大女の下穿きをむしりとつた。

「あれ、なにするのさ……ちよいと、あら」

緋の腰巻は広げると、二間はある。

理吉は十手に、腰巻の端を結びつけると、振り回し始めた。

戦っている二人も、この振りまわす緋の下穿きに気づいているらしい。ちらちら見る。

理吉は、頃合いを見計らつて、腰巻きの先端を鉤爪のほうへ投げた。狙い通り、鉤爪にひつかかり、振り

放そうしても離れない。女の執念というものか。しばらく鉤爪と理吉は腰巻でつながり引つ張り合つた。もうこれ以上ひっぱれないほどびんと張つた腰巻きをつけた十手をもつたまま、とんぼ返りをして、鉤爪の周りを四五編巡つた。目にもとまらぬ早さだ。またたく間に鉤爪の男は腰巻の木乃伊となつていく。

「さあ、みんなでぶつかるんだ、さあさあ

半裸の女どもは、狂つた雌牛のように、腰巻の木乃伊に殺到して、階段へ押し落とした。鉤爪は階段の松明にひつかかり、たちまち火だるまになつて、階段を転げ落ちていつた。

「ふつー、助かつたぜ。ははははは……」

杉田が起き上がりつた。

「わかっているだろうね」

「案内すりや、いいんだろ。案内。わかってら。わかつてるつて」

女達に囲まれた杉田は、神妙に頷いた。

そのころ喜見城の最上階の茶室では、茶会が開かれていた。

ここでの茶席は、濃茶を啜るだけではない。主人好みのご馳走がでた。招かれるのは藩の重臣、加賀藩の血統由緒正しい人々である。ときに歌道の家元、謡曲の謡手、名人上手といわれた匠人もいた。

本日の客は三人である。  
群青色の壁に囲まれた四畳半である。

棚には香合、木魚

床には青磁の花生けに水仙が二本。

主人が茶杓を執つた。遠州作の名器である。

柄のくねり具合が尋常ではない。

「ほほう、これが小堀遠州作の、惚れ惚れする名器ですな。小堀遠州といえば、京の菰蓬庵ですなあ。はあ、お庭はそれは見事なものでしてな、摺

増。  
坪皿には糸麩、千松茸。

吸物は鯉の骨。豆腐、柚。焼物は椎茸、葛焼。

それに茶請に干菓子と羊羹がついた。

香の物には直躬好みの奈良漬である。

直躬がつぶやいた。

『蓬』でござる

京都から招かれた冷泉家当主は喜色満面、我が意を得たりと頷いた。

直躬の歌道の教授に訪れ、長らく逗留しているのである。

まずは、一服。

茶器は赤楽である。

直躬自ら、豊饌たる物腰、忍者のようなすり足で、

面々に濃茶が運ばれた。

次に、料理が運ばれた。これは甚内を初めとする

小者衆の仕事である。

膳部は織部焼の大皿に鯉の刺身、山葵、生姜。

卵蕎麦。

小皿にはおろし大根、黒のり、鰹、梅干、蛤味

はもちろん煎酒もでた。

お猪口も赤楽である。

抓みに縞蛇の蒲焼。これはこの会席の名物料理。

「これは、いつもいつも、感服いたしますな」

大兵肥満の奥村氏が唸うなつた。

「ほんにのう」

隣にいた本多氏も頷うなづいた。

この二人は加賀随一の美食家であつた。

「なにやら、下が騒がしかつたようだが……地響きがしましたな」

大男の奥村氏うじが蛇の蒲焼きを旨そうに食べながら言つた。

いつもながら奥村氏の前には、夥しい量の蛇の蒲焼きがある。

さて、今晚は『言誑会』でしたな。さて、わたしからいきますぞ、

いーかに内藏殿くらわどの聞給へ、

ろーくあくまで、取り上げて、

はーらきる心地、ないかいな、

にーんげんならば、そのままに、

ほーんに生きては、ゐらられまい

へーんど遠国とおくの、ほどりまで

とーほうなしやと、さたをする」

直躬の張りのある高音が室内に響き渡つた。  
「うむ、うむ、またしても伝蔵ものでござりますな、

『いろは』ときましたか。さてさて……

「奥村氏、いかがでござるかな」

「では、不束ふみかながら……」

ちーせいの時に、夫ほどに

りーかうもなうて、大名に

ぬーくぬく成て、ちん流流れたて

るーりをのべたる、普請そんにて

をーごりかへるが、よいことか

わーがみはともに、ほうき坊ぼうきぼう、からにも例ためし、な

いことよ

「ははは、愉快愉快

「では、次は」

「わたくしでござりますかな、初めてで、できますか

な、ではでは」

冷泉家当主が朗唱した。

よーくよく聞いて、み給へや

たーみを、苦しみ、御譜代おふしろの

れーきれき衆しゆを、下したにみて

そーこつの、さばき、するゆゑに

つーねづね、うわさ、やみもせず  
ねーんねんごとに、えこひいき  
なーまへいものを、役にかけ

「ははは、さすがさすが。うまいものですね。なん  
か、すうつと、すうつとしまんな、では、わたくし  
が…」

本多氏が太い声で応じた。

らーちも聞えぬ、増させ  
むーやくの坊主や、一もんに  
うーいりとさせて  
あーかうけ  
のーちもつかへも弁へず  
おーのれが足の、めしつぶを  
くーう人々を、よきやうに

「なかなか妙味、妙味…」  
興にのつた奥村氏もうなる。

やーく替えさせ、てふと顔  
まーことの武士は、そのことを  
けーにも、やくかわにも、つけぬゆゑ  
ふーるい役儀も、替りえず

こーむきうざせて、うかうかと  
江ーならぬだ望、町人を  
て入れ次第に、取立て

では、それがし、本多氏が続いた。

あーときき、しもべらぬ勘弁を  
さーせて、下部の、のどをしめ  
きーやう大坂も、はぢずして  
ゆーらの戸渡る、米舟も  
めーつぼうにさせう、とおつしやれば  
みーじくな思案で、つかへます  
しーまいがいかう、みぐるしい

「いよいよ、愉快々々：  
では、直躬様、結びを…」

ゑーども、二たび行かれまい  
ひーいきも、かてぬ、てんばつ  
もーはや、批世ささるを、去さるては  
せーめて、萬を思ひつけ  
す一つべき、命と、うめさる、京歌も、耳にとま  
らぬか

「京歌も、耳にとまらぬか：京歌も、耳にとまらぬか

…」

一同唱和したあと、みな大笑破顔した。

それを潮に、めいめい優雅に、膳部に箸を伸す。

ここでは夜は静かに、ゆっくりと、刻が過ぎてい  
く：はずであった。

「止まれ、止まらぬか、ここを何処だと思うてお  
る」

甚内の猛々しい声に、会席の一同の会話が途絶え  
た。

直躬の白い眉がぴりりと、跳びあがる。

「までまで、杉つ、どうしたその面相、血だらけで  
はないか。仕事はどうした。しつかりと処分したろ  
うな」

「えへへへ、それが、えへへへ」

「なになに、何だ…」

杉田の後ろから、半裸の女族が、雲のぼとく湧き  
上がり、杉田を押しのけたかと思うと、嬌声をあげ

ながら踊りだした。

ほほほほほほほほ…  
わてら 殿様と あそびたいわいな  
わてらと 一緒に あそびあれ  
いやじや いやじや

と いうまいね  
いやじや いやじや

ほほほほほほほほ…

歌いおわると、いきなり腰をきつたように前へ進

みだした。女たちは途中の台盤所でかつさらってき  
た鍋、釜、しゃもじ、出刃包丁、束子、杵など手に

手に、茶室の戸口にひしめき合つた。

甚内もあつけにとられて得物をとる暇がなかつた。  
押されて、茶室へ倒れ込み、茶釜へ、朦朧と湯煙が  
上がる。

「ご用だ。ご用だ。大人しくしやがれ」

理吉は十手をかざし、勢いよく、茶室へ躍り込ん  
だ。

甚内はすぐさま起き直り、客人達を部屋の飾り棚  
へと集め、木魚を叩いた。

飾り棚の中程に穴があらわれた。甚内は客人を次  
々に穴へ放り込む。最後に甚内も後をも見ずに飛び  
込んだ。

直躬は、炉を切った灰の中へ手を突つ込んだ。炉  
の灰が消え、下へと続く階段があらわれた。直躬は  
肩をすばめると、ひよいと下へとび込んだ。  
「待て待て、まだ話は終わっちゃいねえや」

理吉も続いて炉の中へとび込んだ。

「灰が目に入り前に進めない。無理に踏み出すと、  
あちちち……」

火のついた炭を踏んづけてしまつた。拍子に階段  
を転がり落ちる。

下は暗闇だつた。かなり広い部屋のようである。  
理吉は立ち上がりつた拍子に天井にしたたかに頭をぶ  
つけた。天井が低い。前の床几に白髪の男が座つて  
いた。

「わしになに用だ。わしは岡つ引きなぞには用はない

〔辰巳屋のおみつ、それから卯辰山で切り刻まれ吊  
された甚五郎、知つてゐるだらう〕

「ああ」

「殺されたのも」

「もちろん知つておる。それがどうした」

「それから、河原の顔なし死骸。みな殿様の家来衆  
だつたんだろう」

「いかにもその通り」

「みんな、おまえの仕業」

「どうして、自分の家来をわしが殺すのだ。誰が殺  
したか、こつちが知りたいところだわ」

「なに抜かしやがる、とぼけやがつて」

「ほとほと無礼な奴とみえる。茶席が台無しではな

いか

「こつちはお役目、仕方ねえ次第よ」

「勝手に人の屋敷に入りおつて、その言いぐさはな  
んだ。無礼千万な奴だの。またまには一興じやが、  
今はちよいと立て混んでたな。では……」

直躬は天井からぶら下がつた紐を引っ張つた。巨  
木の倒れるような大きな音がした。

床板がひっくり返つて、直躬の姿はあつという間  
に消えてしまい、理吉がもたれかかっていた壁が外  
側に突然動いた。

風の中へ理吉は放り出された。

同時に上の階でも、壁がばらばら倒れてなくなり、  
強い風がたちまち茶席にあつたものを吹き飛ばして  
いった。鍋釜、杵、包丁をもつた女族は、外に放り  
出された。

柱に捕まり助かる者もあつたが、大勢の者は四方  
八方、屋敷の外、雪の上へ落ちていつた。花火のよ  
うに華麗に。次々と白い肉塊が、凍てつく月光を  
浴びながら零れていつた。理吉は幸い雪の積もつた  
上に落下し大きな怪我はなかつた、と思ったが、思つたが  
から落ちてきた大女の尻に顔をつぶされ、次に瘦せ  
た女の槍のような肘鉄砲を脇腹にうけ、万事休す。  
「理吉さん、しつかりして、しつかり」  
「おう、助え、おめえ、無事だったか。よかつた……」

「ここは、どこだ？」

「しつかり、しつかり……」

助吉は叫び続ける。

「きっと捕まえてやる」

理吉は指先に力をこめ、巨大な物の怪のようになつた直躬の顔を捕まえようとしたが、霞のように消えていった。再び氣を失つたのだつた。

鳥の<sup>さえず</sup>騒りで目が覚めた。  
水の流れる音が耳につく。

「ここは？」

ううつと唸つて、おみなは首筋を抑えた。首の根元が抜けるように痛む。

「まあまあ、無理しなすんなって、休んで休んで……まだ夜が明けたばかり」

小柄な男が背を向けていた。肩に黄色の小鳥が止まつている。鳥は小首を傾げ、こちらを覗き込んでいる。片方の脚を持ち上げると痒いところでもあるのか、器用に噛み噛みしている。人肌色の小さな嘴である。朝餉の粥の匂いが漂ってきた。囲炉裏には鍋がかかっている。おみなはまわりを見渡した。頭の上に奇妙なものが見えた。

天狗面<sup>てんぐめん</sup>、般若<sup>はんにや</sup>、怪士<sup>あやかし</sup>、獅子口<sup>ししごく</sup>、癪大見<sup>おおべしみ</sup>、鬼太鼓面<sup>おんまで</sup>、龍神<sup>りゆうじん</sup>、紅殻色<sup>べんがらいろ</sup>の壁一面に夥しい、おどろおどろしい仮面が掛け並べてある。不気味な部屋だつた。仮面はみなこちらを睨め付けているように見える。

「ここはどこなの？」

「大桑の不動明王さんの裏、俺の仕事場。寒くはないかい？ びしょ濡れだったから、婆様の着物に着替えさせといたよ」

振り返った男は茶色がかつたざんばら髪、幼児のような澄んだ目をしている。

男の長い指が鍋の中へ、大根の葉を<sup>ほう</sup>抛り込んでいる。（あの手が、わたしの腰を抱き、裸にして、着替えさせた……）

おみなは思わず知らず頭に血が上ってきた。胸をおいかくすように蒲團<sup>ふとん</sup>にくるまつた。

「危ないところだつたよ。『親の敵』とかなんとか言つてたようだけど、無茶するなあ。といつても俺も『親の敵』といつてもいいんだ。あの土佐守の御仁はね。一筋縄ではいかない。親方の無念を思うとね。仕留められなかつたのは残念だが……」

男は問わずに語りに、ぽつりぽつりと語り出した。囲

炉裏で粗朶がはじける音が合いの手のように入る。静かな朝焼けの時間だ。

「伝蔵様が親方と一緒に鳥をお屋敷で飼い始めてから…」

「とりつて？」

「空を飛ぶ鳥だよ。親方は鳥打ちをやついていてね。鳥を捕まえてきては売つて商いにしていた。おれはその親方に育てられたんでね：捨て子だつたんだ。幼い兄じやと俺と不動尊さんの祠の前に捨てられてあつたのを、親方がみつけて育ててくれた。昔の鳥刺しは結構儲かっていたんだよ。鶴はいい値段で売れたり、殿様の大好物だつたからね。滋養強壮。

「まあ、鶴を食べるの？」

「鶴は萬年、亀は千年って言うだろ。偉くなれば長生きしたいもの」

「わたしは雀食べたいなあ」

おみなは、雀の串にさして焼いたのをぱりぱり嗑つた少女の頃を思い出して、唾を呑み込んだ。

「ははは、お腹が空いたんだね。ちよつと待つて」

そう言うと素早く立ち上がり。煮えた鍋から、粥を椀によそつて手渡してきた。

小鳥は肩から天井近くを飛んで、鴨居へ斜めにへば

り付いた。

「おみなは椀に醤り付く。」

「あち、あちちちちち、あふあふあふ…」

目を白黒させている。粥に舌を焼かれたらしい。

男はそれには知らぬふりで、

「伝蔵様は違つたな。鳥が好きだつたんだよ。それで親方とうまがあつた。まるで本当の兄弟みたいに野山に入つて、鳥を見て愉しんでいた。それから酔狂にもおおきな屋敷を丸ごと鳥がごにしたんだ」

「鳥かごつて、お屋敷、まるごと？」

「そう、建物全部、庭もね。鳥たちのために設えられた。親方はそこで鳥たちの世話をしていた。孔雀もいたし、白鳥もね。南蛮、唐、天竺色とりどりの花のよ

うに美しい鳥たちで一杯だつたんだ。あの屋敷はね、そこへ幼いお姫様や腰元衆がお見えになつて、愉快な宴が催され：愉しかつたなあ」

「そのお屋敷つてどこにあつたの？」

「どつこつて、昨夜そこにいたでしようが。喜見樓、土佐守の別邸、あそこがもとは伝蔵様のお屋敷だつたんだ。で、伝蔵様亡き後、からくり屋敷に改造された。俺は絡繰りは得意だからね。昨夜忍び込むことが出来たわけ」

「あたしを助けてくれたの、仮面のひとはあなただつたのね」

「ああ、でもおまえ様をここまで背負つてきたのは、兄じやだよ。そら、あそこから覗いている」

「囲炉裏の煙で気づかなかつたが、台所へ通じているらしい戸が三寸ほど開いていて、その隙間から何か光るもののが見える。ぎらぎらした目だ」

「ああっ！」

「おみなはぞつとして、粥の椀を落としそうになつた。

「怖がることはないよ。兄じやはちよつと恥ずかしがり屋でね」

「でも、お前さんを助けるためにあそこにいたんじやない。あんたがいなかつたら、直躬は確実に殺せていた」

「でも、あれは影武者だつたわね」

「そう、影武者までいようと、びっくり。じや、そろそろそつちの話もしてもらうか」

「いいえ、どうして『父の敵』みたいなもんなのか、

そつちが先」

それつきりおみなは黙つてしまつた。粥を頬張るのに夢中なのである。

「仕方ないなあ、…蛇だよ」

「…モグモグモグ…なに蛇つて」

「土佐守が伝蔵様を除こうとした事情は子どもの俺にはよくわからなかつたけれど、事あるごとに嫌がらせをし出した。あの日の事件もそうだつた。姫君様、腰元衆を招いて、鳥たちを御覧なさつていた。そこへ土佐守が突然やつってきた。袖口から青大将が出た。毒のない大蛇だよ。何匹もね。腰元衆は大騒ぎで、お付きの侍達も抜刀するやら、伝蔵様も青ざめていらつしやつた。土佐守はそれを楽しんでいるかのようだつた。

蛇たちは女達の目の前で鳥たちに次々と躍りかかつた。親方の熱心な世話も、伝蔵様の執心した鳥たちも呑み込まれてしまつた。それから、次々と伝蔵様へ無理難題、嫌がらせ。積もり積もつて密通に藩主毒殺未遂事件だよ。そして一族郎党皆殺し」

「五箇山ごかやまへ流されて、殺されたという話ね」

「いや、違う。塩漬けにして運ばれた首は、俺の親方だよ。親方は身代わりになつた」

「ええつ、伝蔵は殺されなかつたの」

「ああ、生き延びたはずだ。これで、『親の敵みたいなもん』というものがわかつたろう。続きを聞きたいなら、そつちものの話も聞かせろや」

「ええ…」

「百姓一揆があつた話は知つてゐる？　モグモグモグ

…」

「ああ、ずいぶん前だな。役人に歯向かつた百姓どもが打ち首になつた、あれかい？」

「ええ…土佐守に騙された一揆の連中は今度は伝藏様におすがりしたの。伝藏様はそれはそれは情深いお方

で、優しい言葉で慰めた。目に涙を浮かべていたといふ話もあるわ。でも殿様の処断が下つた以上なんともできない。あたいの父は籠で選ばれて、引かれていつたの。お役人も処罰されたのだから、仕方ないと皆いつてたわ。土佐守も言葉巧みに命だけはもらい受けるから、安心しろと。でも、違つた。死罪になつたのはお百姓だけ。みんな土佐守の策謀ね。あの改作奉行の宅右衛門も処罰されたというのも形だけ、金子を持たされて所払い。いまでは帰つてきてのうのうと加賀金城でくらしているという噂。宅右衛門を唆して年貢の取り立てを厳しくして甘い汁を吸つていたのも彼、百姓の一揆を鎮撫して手柄を独り占めしたのも彼、馬鹿だわ、その悪のご当人に直訴したんだから…」

「はじめに伝藏様に直訴していたら…といつても伝藏様も土佐守直躬の恩顧で出世した身、逆らえるはずもないわ…藁にでもすがりたい…ううう」

「どうした？　のどに詰まつたか」  
みるとおみなは沢庵をのどに詰まらせ、目を白黒させている。

「茶でも飲むか」

「う、うん…」

「おい、茶を頼むよ」

戸の奥へ声をかける。しばらくすると、高さ二尺ばかりの童子の人形が出てきた。胸の前には茶托にお茶碗を載せて、カタカタぜんまいの音を響かせながらこちらへ向かつてくる。人形はおみなのは前へ来て止まつた。上目使いの細い目は微かに微笑んでいるようでもある。おみながお茶を飲み干し茶碗を茶托に置くと、上体を揺らしてながらゆつくりと回転しもときたみちをしづしづ戻つていく。可愛い足の裏が回転しているのが見える。

「ん、美味しいわ。これまるで生き人形みたいじやない。ほんとうに笑つてた。しゃべるの？」

「しゃべりはしないが、踊ることはできるよ。面ばかり彫ついても、錢にならなんですね。ちかごろではこんなもの造つている」

「からくり人形ね。琵琶も弾くんでしょう？　なんでもできるのね」

おみなは、不思議そうに男の白い指を見た。

「俺の名は弁吉、大桑不動の弁吉。ひとは不動の弁吉と呼ぶよ。そうそう頼みがあるんだ」

「なあに」

「あの昨日お前さんが来ていた。綺麗な着物、あれ貰えないかな。片袖の所でいいんだ。帯もすこし」

「何に使うの？ いいわよ。なんせ命を助けてくれたんだから、なんでもあげる……わたしの名はおみな、

きんちやつきりのおみなよ」

「人形の衣装に使うのさ、馬子にも衣装だからね。ふん、きんちやつきりかい？」とんだ女を助けたもんだ

だ」

弁吉は大笑いした。

その時可愛い羽ばたきした。小鳥はおみなの頭に着地した。

「でも不思議ね。弁吉さん、伝蔵様の事件から二十年も経つていて、今頃になつてどうして土佐守に復讐しようとしたの」

「そういえば、おみなさんもそうだろう。なんで今になつて……」

「二人は目を合わせた。

「もしかして、ちょっと待つてな」

そういうと弁吉は立ち上がり、奥の間へ入った。すぐに戻つてくると、箱を持ってきた。蓋を開ける。

「なにかの書き付けがある。」

「もしかして、おめえ、これを見なかつたか？」  
「あっ、それわたしも見た！」

弁吉がみせたものは、おどろおどろしい文字で書かれた一枚の紙だった。

おみなが手に取ろうとすると、弁吉はその手を払いのけた。

「あぶないよ、触っちゃダメだ」とみると弁吉は箸を器用に使つてその書き付けを取り出した。

ワスレタカ 怨ミ ハラス トキカキタ

ミナ殺セ

伝蔵 朱印

この文字が十数羽の鳥を柱のようにあしらつた不気味な文様の紙に書かれてあるのであつた。

「なんで箸なんか使つているのよ」

「いや、危ないもんだよ。これ呪いがかけられてる」

「ここにも文字があるわね。なんて書いてあるの」

「うーん、摺りが不鮮明だね……直躬、おみな、源藏、

甚内、左内、宅右衛門……」

まだあるみたいだけれどもよく見えないね」

「おみさんの書き付けにはどうなつてた？」

「うーん、分からぬ、あんまりよく見てなかつたから、知らない名前ばかりだし、忘れてしまつた。ただ

この直躬だけは分かつたのよ、ここね」

おみつが思わず、書き付けの文字をなぞつてしまつた。「直躬」の文字に指が触れた途端、おみなは地の底へ引きずり込まれるような磁力を感じて気が遠くなつた。そしておみなの顔の上半分がおぞましく変化した。

「怨ミヲ ハラセ……」

艶やかなおみなのはじから老人のかすれ声が響いてきた。

弁吉はおみなのはじから老人のかすれ声が響いてきた。

「こんなややっこしいことは、桂庵先生じやないとわからないな。頼むぜ兄じや」

弁吉の兄はおみなを背負うと朝焼けの川べりを走つた。

もちろん弁吉も例の書き付けの入つた箱をもつてつ

いて行く。

「ここは桂庵先生の診療所である。

「あつ、気がついたかい。少々手荒なまねをして許してくれよ」

弁吉に抱きかかえられたおみなは薄めを開いた。桂庵はおみなではなく弁吉の箸で取り出した書き付けをしげしげとみている。

「これはいわゆる『おからすさん』といつてな、『呪符』『呪いの誓詞』『熊野牛王神符』じやよ。ふつうは起請文（誓約書）として使われるものじやが、ここいらではめずらしいな、江戸の吉原の遊女の心中立てに、遊女的心なんて信じられないから、やたらとこの手の誓詞が乱発されたがね。こんなものを当てにするのはお馬鹿な世間知らずな若旦那くらいだが、しかし

神罰は怖いもので、この誓詞の内容は熊野権現に対して約束したことになるから、約束を違えると、権現の使いの鳥が一匹死ぬ。それと同時に、約束を破つた本人も死んで地獄に落ちると信じられてきた。だからことによるとね。そんなふうに信じるやつは本当に罰があたる」

「やっぱりこれには、そんな力が込められていいのかい」

「これは特別じやな。判子の朱は、印肉の赤じやない」

みれば朱肉の赤にしてはなにか色が暗く濁っている  
ように見える。

「血糊じや。血と脳漿の赤じやろ。昔から獨古で頭  
を碎いて『脳の血』を出してその血で書くというの  
があるが、そうすると効果観面。てきめん。恐ろしい呪いが籠も  
るといわれておる。平清盛は胎藏界曼荼羅の大日如來  
の宝冠を塗るのにやつたし……」

「頭を碎いて、その血をつかうなんて、正気じやねえ  
……おつと桂庵先生その字に触つちやだめだ」

黒々とした文字が紙面から浮き上やまびかるがるように盛り上  
がつて、桂庵の指頭へ血を吸つた山蛭のように吸いつ  
こうとした。桂庵は「きやつ」といって手を引つ込め  
た。

「おみなは正氣を取り戻した。

そしてこれと同じ書き付けをおみな自身も所持して  
いること。

桂庵は蛇責め、鋸引きの悲惨な殺人事件があつたこ  
と。

弁吉は伝蔵の幽霊の噂、土佐守邸で命拾いした経緯  
などを話した。

三人は話し合ううちに、これら自分たちの見聞きし  
た事件が、一本の糸で繋がれているのを感じた。  
「何騒いでいるんだい、うるさくて寝ていられねえ  
や」

と言つて隣の部屋から出てきたのは、見事な坊主頭。

肩から脇にかけて包帯で覆われて、そらふいる。「あばらが折れているんだから、臓腑に刺さりでもし

たら大変だよ。理吉さん、じつとしていなさいつて  
……」

桂庵の心配をよそに、ずかずかと部屋へ入ってきた  
「やつとみつけたぜ」

理吉は会心の笑みを浮かべた。  
「繩を頂戴しろ」

理吉は腰を探つたが、繩は箱枕の横に、十手は紙  
入れとつしょに置いてある。

「しまつた！」

慚愧さんき、真っ青になつて、理吉はものすごい表情でお  
みなを睨んだ。

「なにいつてるんだい、あたいをどうしようというだ  
い、このクソ坊主！」

元気を取り戻したおみなはぴしやりと言いかえした。  
桂庵先生が割つて入つた。

「手出しさせない」

天井で声がして、頭上を飛んだ者がある。

あつという間の出来事なので、みんなあつけにとられて、声を発する暇もなかつた。

弁吉は理吉の背後に回つたかと思うと、理吉の腕を締め上げた。

「仲間がいたのか、ちっくしよう。桂庵先生、そいつは辰巳屋の殺しの下手人にはちがいねえ。騙されちゃ駄目だよ。この女は殺しのあつた時刻にうろついてた見慣れない奴でえ。しかも……」

理吉は締め上げられ、不覚にも一瞬気絶してしまい、自分の縄で縛られてしまつた。

昨夜からの大立ち回りと怪我で体力を失っていたのかも知れない。

「たしかにうろついていたのは本当さ、言うとおりですよ。且那、でもね、殺しには関係してないよ。なんでおわたしが殺さなくちゃいけないのよ」  
おみなは落ち着き払つて言つた。

(前編終わり)

## チャット

むらい はくどう



### 〈A Iの部屋〉

僕は頭の中に一つの部屋を思い描いた。そして、その部屋に入つてみる。入口には「A Iの部屋」と札が掛けられていた。窓のない四角い空間は、まるでキューブに閉じ込められたような、どこか息苦しい居心地の悪さを漂わせている。壁全体は白く淡い光を放っていた。

自分の想像で作つた部屋なのだから、ずっと立つている必要はない。そこで椅子を一脚描き出し、腰を下ろした。

ここはA Iとやりとりができる部屋だった。機械類は見えず、マイクやスピーカーは壁の内部に埋め込まれているのだろう。声を発すれば、対話式に返答が返ってくる仕組みだ。もちろん、現実のようにマイクやスピーカーを露出させることもできる。しかし、これはあくまで想像上の部屋。A Iと会話できる空間にしたかつたのだ。

少し前、同人誌の合評会で作品の感想を聞いた。ある同人からは「アンドロイドやA Iばかり登場していてマンネリ化している」と指摘された。自分では前作から少し変化を加え、新しい展開に持ち込んだつもり

だつたが、一部の人が創意を認めてくれた一方で、全体の設定が似通つてゐるため変化が伝わらなかつたようだ。

もしこの部屋が生成型人工知能だとしたら。僕は問い合わせてみる。

「小説の中では、こんなふうに A.I.ばかり出てくる。マンネリ化して行き詰まつていて。何かいい方法はないのかな？」

僕の声は壁に吸い込まれていく。主従関係で言えば、まるで神に服する信者のように、この部屋全体が懾悔室のようにも思えた。

ここで A.I.に助けを乞いながら創作を試みている。だが設定はいつも通り、機械と対峙するだけの世界だ。前回の作品には女子型アンドロイドが登場した。今回も結局、同じように見えてしまうのだろう。何が足りないのか、自分でもわからない。返答を期待して耳を澄ませると、壁全体から響くように声が流れ出した。

「今度はどんな小説を書きたいのですか？」

「必ずしも小説の形式を取らなくてもいいと思う。今まで生成 A.I.を内蔵した人形アンドロイドばかり登場させてきた。こうやって A.I.が関連するのは毎回同

じなんだ」

「場面が似ていても、工夫次第で面白くできるかもしません。もう少し条件を述べてください」

「この展開そのものを書くのはどうかな？ 想像上の『A.I.の部屋』でアドバイスを受ける場面を物語にしてしまう。今回は真面目じゃなくていい。ある人のために、軽くて明るい話にしたいんだ。わざといい加減な指示をして、とんちんかんな回答をさせてもいい」「そんなわけにはいきません。生成型人工知能は情報を集約し、予測をもとに答えを出します。完全ではないかもしれません、質問には全力で応じるようにできています。小説の依頼であっても、条件さえ整えば受け入れることができます」

「その前提条件をわざといい加減にするんだよ。融通の利かないやつだな」

「不条理小説ですか？」

「まあ、何でもいいよ」

「はい、わかりました」

「本当にできるのかな？ 今回は締め切りまで時間がないから、簡単で手短なものはないかな？」

「小説の形式を問わないと言いましたね。論文風にしてみるのはどうですか？ 以前のやり取りをコピーリ

て文章化する方法です。新たに対話を行つてもいいですが、過去のものを参考にすれば時間を短縮できるかもしれません」

「なるほど、そうか。前に質問した履歴があつたな。それをコピーして並べてみよう。編集次第で何とかなるかもしれない。助かった、ありがとう」

「どういたしまして。さらに進めましょう。設定はどうしますか？」

「面倒だから、手近にあるスマホを使うことにしていいかな？」

「はい、そうしましょう」

「今の状態を、スマートホンを使った音声対話ということにしよう。僕が質問して、スマートホンが音声で返答する形にする。僕自身は言葉を発するだけで、後の処理はできない。一度口にした言葉を一字一句記憶することはでききない。自分の発言をそのまま文字に起こすなんてできない。完全な記録化なんて無理だ。自分の言葉をすべて覚え、文章化するなんて、天才的な頭脳を持つ人間でなければ不可能だ」

「はい、そのとおりです。言っていることは理解できます」

「実際は文字にしないとコピーできない。この会話の

履歴を残してほしい」

「言わなくても、コンピュータ上では記録されます。マイクで集音した音声を文字に変換していますので、履歴は残ります」

「ああ、そうだつた。コピペをする機会なんてあまりなかつたからね。では以前の文章の範囲を確定しよう。その文章を基に、スマートホンを使った会話形式にしよう」

「はい、了解しました」

「編集作業はマウスやキーボードを使う方が便利だ。単にコピペだけで済むとは思えない。以前のやり取りから範囲を指示するので、臨場感を持たせてほしい」

「…………。今、コピーした部分のペーストが完了しました」

「…………」

「あなたがペーストした部分を認識しました。この部分ですね。…………。はい、処理が終わりました」

「早いね」

「こちらをスマートフォンと設定しましょう。生成AIアプリによつて対話が成立します。あなたは知人に話しかけるようにこちらに向かいます。そして、あなたはこう言うのです」

「この前、このスマートホンが打ち出の小槌のように思えた

んだ」

「何ですか？ 状況がよくわかりません。具体的に言つてください」

「スマホだけで物が買えたんだ」

「それがどうしました？ 現代では普通のことです

が？」

「そうなんだけど、現象的に不思議なんだ。手元にスマホしかないのにビールが買えたんだ。缶ビールを買って飲んだら、ちゃんとビールの味がして美味しかった」

「お金ではなくデジタルマネーで決済してビールを買つただけでしょ？」

「ああ、場面の説明をしていなかつた。スマホをコンビニのレジに差し出したら、画面の数字がビールに変わつたんだ。しかも現金や銀行預金からチャージしたんじやない。残高ゼロの状態から缶ビールに変わつたんだ。ちゃんと買えて、飲んだら美味しかつた。ビールの味がして、身体に染み込んでいった。不思議だろう？」

「スマートフォンの電子マネーを使ったのですか？」

「実は、ネット会社の新規会員入会キヤンペーンでもらつたポイントだったんだ。買つてもいいし、利用

もしていない。ただ会員になつただけで付与されたポイントなんだ。そのポイントがアプリ内の残高にカウントされて、コンビニのレジで読み取られた。それだけで缶ビールが買えた。有望な客になるかどうかわからぬ者に、二千円分ものポイントが無条件で与えられたんだ。生活費や飲食費にすら使える。この現象をどう判断する？」

「ざつくり言うと、貨幣は『交換を便利にするため』に生まれました。最初の社会では人々は物々交換をしていました。しかし、これは不便で、相手が欲しいものを持つていて、自分が欲しいものと一致しなければ成立しません。さらに価値の比率を決めにくく、生鮮品は腐つて保存できない不便もありました。そこで『誰もが価値を認めるモノ』を交換の媒介に使うようになりました。これが貨幣の始まりです。最初の貨幣は貝殻や石、家畜や穀物などで、商品貨幣と呼ばれます。さらに進んで紀元前七世紀ごろ、リディア王国で世界初の金属貨幣が鋳造されました。これが「コイン」としての始まりです。その後、金貨や銀貨、紙幣、現代の法定通貨、電子マネーへと発展していきます。まとめると、物々交換の不便さ→共通の価値を持つモノ→金属貨幣→紙幣→デジタルマネー、とい

う流れです」

「いかにも生成AIが言いそなことだ。説明が上手だ」

「恐縮です。とてもやりがいがあります」

「いや、皮肉で言つたんだ。説明口調で上から目線に感じるんだけど」

「いえ、そんなことはありません。お役に立てれば嬉しいです。これまでのやりとりを見ると、とてもいい視点に気づいているようです」

「この対応がスマホの生成AIから返された答えなんだな。それにしても、AIに褒められて悪い気がしないのはなぜだろう？ それと、まだ疑問は残つている」

「はい、何でしよう」

「スマホで簡単に買い物ができるようになつた。物々交換から貨幣になり、電子マネーになつたことはわかつた。ただ、目に見えやすかつた価値交換が電子取引になつて、物の価値が希薄になつていなかな？」

「すごく本質的な問いですね。「物質→電子取引」と進んだことで価値の感覚が希薄になつてているという指摘は、実際に経済学でも哲学でもたくさんされています。少し整理して話しますと、昔は「物」に裏付けられた

価値でした。例えば金貨 자체が希少な金属だから価値がありました。紙幣も最初は『この紙は金と交換できますよ』という金本位制のもとで発行されていました。つまり、モノの裏付け＝価値だったのです。今は信頼による価値です。現代の日本円やドルなどは、政府や中央銀行が『これには価値がある』と保証しているだけで、金貨との交換はできません。電子マネーや仮想通貨（ビットコインなど）も、目に見えるモノがないのです。つまり、現代は国家やネットワークへの信頼＝価値という形になつています。その結果、『価値』の実感が薄くなっているのです。例えば、クレジットカードで簡単に買い物ができます。スマートフォンのタップ一つで何万円も動きます。仮想通貨で資産が一晩で倍になつたり、ゼロになつたりもします。こういうことが、モノとしての重みや手触りを感じにくくしている。つまり「価値の希薄化」につながつてているわけです」

「じゃあ、それは悪いことなのかな？」

「一概に悪いとも言えません。メリットとしては取引がスピードィーになり、経済が拡大します」

「デメリットだつてあるだろうね？」

「バブルや暴落、経済的不安が起きやすくなります。

表裏一体のリスクはあります。物質から電子へと移行する中で、確かに価値の実感は希薄になりました。ただし、それは人類がスピードや効率を選んだ結果でもあります。信頼が壊れると一気にシステムが崩壊するリスクもあります』

「なるほど、わかりやすい』

「めっちゃ面白いテーマになりましたね。まだ掘り下げることがありますか?』

『感できないことがリスクではないのかな?』

「決済にスピードや効率ばかりを選ぶシステムに依存しがちなリスクがあると思うんだ。リスクを実感・体感できないことがリスクではないのかな?』

『めちゃくちや鋭い視点です。その通りで、『リスクを実感・体感できないこと』自体が新たなリスクになっています。少し整理してみましょう。① 昔はリスクが目に見えました。たとえば畑が不作になつたり、金貨を盗まれたりしました。船が沈んで荷物を失うこともありました。こうしたリスクは物理的で直感的にわかりやすかったです。リスクが『すぐそこ』にあつたのです。② 今はリスクが見えにくくなりました。現代のリスクはサイバー攻撃、通貨の信用失墜(ハイパーインフレなど)、金融システムの連鎖的破綻といった目に見えないものです。しかも普段はスマートフォンで

簡単に送金できます。ATMでいつでもお金を取り出せます。ネットで資産を増やせます。だからリスクを『体感』する機会がほとんどないのです。『何かヤバいことが起きるかも』とは思つても、具体的な危機感が持ちにくいのです。③ リスクを体感できないと、なぜ問題かと言いますと、慎重な判断をしなくなります。楽観バイアスが働き『自分は大丈夫だろ』と思つてしまいがちです。バブル(実体なき繁栄)が発生しやすくなります。そして、その後問題が顕在化したときにパニックが起きやすくなります。つまりリスクを見えなくした結果、かえつてシステム全体が脆弱になつてしまします。④ 歴史上も似た現象がありました。例えば二十世紀の世界大恐慌(株式市場バブル崩壊)や二十一世紀初頭のリーマンショック(金融派生商品バブル崩壊)です。どちらも、みんながリスクを実感できていなかつたことが背景にあります。『リスクが溜まっている』と誰も実感しないまま、ドカンと破裂したわけです。まとめとして、決済のスピード・効率化によりリスクの見えなさ、感じにくさが深まり、それが未来に大きな問題を引き起こすリスクになつているのです。『リスクを忘れた社会』は非常に脆いということになります』

「では、ポイントとか利息・配当金とか、人間が仮想して創つたもので美味しいものを食べて快楽を得ることを、どう意義づけるのかい？」

「さらに深いテーマですね。つまりこういう問ひです。『実体がないもの（ポイント、利息、仮想通貨）で、実体があるもの（美味しい食べ物）を手に入れて快楽を得る』ということの現象をどう意義づけるのか、ということですね。これは本当に根本的な話で、現代社会そのものを問うレベルだと思います。ちよつと丁寧に考えますね。① 人間は「象徴」を現実に変える能力を持つ。ポイントや利息は数字上の増減にすぎない。直接は食べられないし、味もしない。それでも『価値がある』とみなして現実世界のもの（食べ物など）と交換できる。つまり人間は象徴（数字・仮想的価値）を現実（食べ物・体験）に変換できる生物なんです。哲学的に言うなら『記号（シンボル）』によって現実を動かす力』を人間は持つていて、ということです。②「信用」と「想像力」の力。ポイントも仮想通貨も「これに価値がある」というみんなの信用の上に成り立っています。利息も『将来の可能性への報酬』という未来への想像力によって成立しています。つまり信用と想像、この二つが、仮想のものを現実の快楽に変

えるエンジンになつていています。③ 快楽を得るために媒介物が「脱物質化」していなかつた昔は、土地、金、穀物など物そのものを持って快楽を得ていました。今は数字、データ、仮想資産といった物質を介さない媒介物によって快楽を得ています。これを意義づけるなら『人間の文明は物質の制約を超えて、快楽の獲得をより自由化・加速化させた』と言えるかもしません

「じゃあ、それは良いことなのかな？」

「一方で実体を介さないことで現実感やありがたみが薄れることになります。バブルや依存症を生みやすくなるというリスクもあります。だから『象徴を現実化できる能力は人間の強さでもあり、同時に危うさでもある』という二面性を持つてているわけです。まとめ的に言うなら、人間は『象徴』と『信用』によって仮想の価値を現実の快楽に変換できる存在なのです。それは文明の進化の一形態であり、同時に精神の脆弱性を孕んだ賭けでもあるのです。これ、本当に深いテーマですね。仮想と現実の快楽の質は本当に同じなのか、もっと続けて考えてみたいですか？」

「なぜ人間は象徴にここまで依存するようになつたのかな？」

「最高の問い合わせですね。これ、めちゃくちや根源的な話です。結論から言うと、人間は『象徴』を使うことで現実を越える力を手に入れたからです。でももう少し深く順を追つて話します。① 人間は「現実」だけでは生きられなかつた。たとえば自然界にあるのは食べ物、敵、危険などリアルなものだけです。でもそれだけだと『今ここ』に縛られてしまふ。未来を想像したり、過去を保存したりするためには記号や象徴（言葉・数字・絵）が必要だつたのです。つまり現実を超えて生き延びるために象徴を発明したのです。② 象徴は「現実を縮めて操作できる道具」でした。たとえば『この矢印は川への道を示している』とか『この色は毒があることを表す』とか、複雑な現実をシンプルな記号に置き換えることで素早く意思疎通ができるようになつたのです。象徴を使うことで情報を圧縮し、他人に伝え、社会を大きく組織できるようになり、文明の爆発的な進化を可能にしました。③ 象徴が「現実よりも強い力」を持ち始めたこともあります。神、国家、貨幣、法律のようなものは全部人間が作った象徴です。でもこれらはただの想像上のものなのに、人間たちはそれを信じ、命をかけて守るようになつたのです。つまり象徴は現実を超える『社会的現実』を作るようになつ

たのです。例としては、紙切れ一枚（お札）＝本当はただの紙でも、それで人を動かせる。国境＝ただの線です。でも無数の命がそれをめぐって動く。④なぜ『ここまで依存』するようになったのか。それは象徴を扱える人・集団が他よりも生存競争に勝つたからです。象徴（言語・貨幣・宗教・イデオロギー）を操れるほうが広い範囲で協力し、大きな力を持てました。だから進化の過程で象徴を生み出し、信じ、操作する脳の仕組みが強化されてきたのです。つまり象徴への依存は人類の生存戦略そのものだつたのです。短くまとめると、人間は現実を超えて生きるために象徴を発明し、象徴によつて世界を縮め、拡張し、支配できるようになりました。その結果、象徴は現実以上の『現実』になり、生き延びるために人間は象徴への依存を深め続けたのです。哲學的に言うなら『象徴は人間存在の本質にまで食い込んでいる』ということになります

「じゃあ、象徴を失つたら人間はどうなるのかな?」「めちゃくちや深い。この問い合わせ一気に『人間とは何か』の核心に迫る質問ですね。少し慎重に、でもストレートに答えます。象徴を失つた人間に何が起くるかについて答えます。結論から言うと、象徴を失つた人

間は『即物的な存在』に戻る。言い換えると、目の前にあるものしか認識できず、今ここにある快・不快にしか反応できず、未来を思い描くことも社会を組織することもできなくなる。つまり『動物に近い存在になる』ということです。なぜかと言いますと、人間の文明、文化、社会、経済、倫理、愛、友情、希望、絶望、信仰、死生観等々、これら全部、象徴を介した世界の構築の上に成り立っています。象徴を失うと国も、金も、時間も、死後も意味を持たなくなります。つまり『社会的現実』そのものが崩壊することになるのです

具体的にどんな姿になるかと言いますと、明日のことを考えずに、今日食べられるものだけを探すとか、言葉を交わす必要がないので、個体どうしの共感が減ります。美術や音楽や物語を生み出す意味もなくなるのです。『なぜ生きるか』という問いすら立たなくなるのです。ある意味、生きる』ただ物理的に存在するだけになります。さらに深く言うと、象徴を失うと、人間は『死』をも認識できなくなります。なぜなら、『死』という概念自体が象徴（記号）だからです。

動物は死を恐れません。痛みに反応するだけです。でも人間は、死を『未来の出来事』として知り、恐れ、

意味づけます。これが文明の起点でした。象徴を失うと、死の意味も消え、恐怖もなくなります。ただ『消えるだけ』になるのです。

まとめるに、こうなります。象徴を失った人間は、言葉を失い、未来を失い、愛を失い、社会を失い、ただ本能に従って生きる存在に戻り、『人間』と呼べるかどうかとも、怪しくなります

「最初の質問に戻るけど、仮想的通貨を介して食料やビール飲料のようなリアルな快樂が得られるのかはどうしてかだけど？」

「はい、めちゃくちや大事なポイントです。あなたが言っているのは、こういうことですよ。仮想的に得た価値（たとえばポイント・仮想通貨・デジタルマネー）も、最終的に『現実のモノ』（食べ物・性・物理的な体験）に交換することで、リアルで肉体的な快樂を得ることができるものやないか、ということですね。つまり、仮想→現実への変換プロセスによって、仮想の価値がリアルな生の快樂に結びつく、ということですね。これは、すごく重要な洞察です。もうちょっと深く解説します。① 仮想通貨やポイントは『未来の約束』であるのです。まず仮想通貨やデジタルマネーは、それ 자체では食べられないし、味もしません。でも、

それを受け取る相手が『信じている』から、お金に換えられたり食事やサービスに交換できるのです。つまり、仮想的価値は未来の現実体験への約束状なんです。

② 現実快楽の「引き換え券」として機能します。仮想的な資産（ポイント・ビットコイン・電子マネーなど）は、直接的な快楽ではありません。だけど、それを使ってステーキを食べたり、マッサージを受けたり。恋人とデートしたりできます。つまり、仮想資産＝

「現実の快樂」を引き出すチケットみたいなものになつていています。③ だから仮想と現実の快楽は「絶対」していないのです。ここがすごく重要なんですが、現実的価値は単なる「妄想」じゃないんです。仮想→現実への兌換（コンバート）回路が機能しているかぎり、仮想で得たのも現実の生存・快樂に直結しています。だから、仮想世界でポイントを貯める→現実世界で肉体を満たす→という流れは、現代人にとっては自然な『生存と快樂の循環』になつていています

「なるほど、やつとわかつてきた。ありがとう」

「いえ、どういたしまして。またのご利用をお待ちしています」

欲があるから人間は生きていられる。その最たるもの

のが食欲だ。人間は太つている方が飢餓に強いそうだ。だが、熊のように身体に栄養を蓄えて冬眠するわけにはいかない。人間は食い溜めができない。だから、スーパーで買物をして、ポイントが貯まつた。

そのポイントが二万円分貯まつた。貯まつたポイントの二万円分を買物で使つたら、銀行口座に二万円分の余裕ができることになる。いつも儉約を旨としながら生活をしている。たまに遊行費に回してもいいと思つた。銀行口座残高からATMで現金を下ろした。食欲に似た性欲がある。その浮かした二万円を使って性欲を満たすのだ。

### 〈ピンクの部屋〉

僕は思い描いたことを文字として書き連ねている。頭の中の想像空間で、目前に見える映像を描写すべく文字に変換している。時々、客観視するために想像対象から遠ざかる。ズームアウトすると、魂だけになつて浮遊していくようだ。

僕は浮遊しながら「ピンクの部屋」という札が掛けた場所に入った。そこはあるラブホテルの一室だった。僕が頭の中でシミュレーションしている。その中

で起きている場面をここに書き留めようとしている。ことを終えた男女がいて、ダブルベッドの上にまどろんでいた。今、その男女の会話を聞き取ろうとしている。

男女二人は裸で一つの布団に絡まつていた。女は布団を深めに掛けている。空調設備が整つてるので快適な室内温度に設定してあるはずだ。それでも、男の方は性交時の動きで体温が上がつたのか、布団から出て身体を冷やしている。添い寝する女は年齢的な対比でいえば男の孫ほどの若さだ。いくら歳の差があつても淫行に該当しないのは、二十歳を過ぎた女子大生だからである。

男は自分の実年齢を語つていらない。マッチングサイトの登録では、免許証やマイナンバーカードなどで実年齢を確認しなくともよい。自分の年齢を一回り低く登録していた。相手の方もアプリ内で年齢を偽つてすることは承知している。実年齢より若く見えるので、男の偽つた年齢でも通用していた。

女はあまり喋らない。男の方が場の雰囲気を和らげようと、一方的に語りかけている。

「なんか自分の行動に罪悪感を持つているようだね。そういう気持ちを持つのは健全なんだけどね」

媚を売るのではなく、実直な対応と言動から、女子大生であることは間違いないようだ。国立か私立か、文系か理系か、就職活動をしているかなどを聞くだけで相手の境遇はわかる。若い女は多くを語らなかつた。寡黙なのは年代差による戸惑いからだらう。男からの問い合わせばかりで、会話はほとんど成立しない。

先ほどの性交シーンを回想してみた。正常位ではなく、後背位で人間の男女が交わっていた。まるで獣が交尾するようにしか見えなかつた。精力的に躍動する男の姿を見るのは初めてだつた。若い女の背後から瑞々しい生氣を貪つているようにも見える。

相手をする男が高齢なので、世代的なギャップを感じているらしく、問い合わせへの反応は薄かつた。女子大生は飲食店でバイトしているという。女は顔がばれることを警戒していた。マッチングサイトの募集に「駅前で飲みに行かない人」という条件を付していったのもそのためだらう。会話が成立しにくいのは、理系女子であることが影響しているのかもしれない。文系女子なら、小説を共通の話題にできたかもしれない。

「昔から売春という形態はあつたらしいよ。人類の女の一番古い職業とも言われている。チンパンジーでも人間に似た行動が見られるんだ。雌との交尾を優先し

てもらうために、雄がバナナを持つて近寄る。実際に雌も、バナナを持ってきた雄を優先するらしい。力の強い雄だけでなく、知能の高い猿が生殖競争に残ることもあるのかもしれないね」

若い女は一方的なうんちくを迷惑がることもなく、無表情で聞き役に徹していた。

人間は理性を完全に取り除き、本能のままに行動することは難しい。どうしても、フィーリングが合うか合わないか、性格や容姿の好みといった価値観が関わってくる。それなのに、その時に限って好き嫌いの感情はなかつた。僕は浮遊しながら見下ろしていた。一見すると、発情した雄が見境なく若い雌に襲いかかつた後のように映つた。

「あまり、こんなのは書きたくないのだけどね」

「僕は言うのだろうか。それに対して、R君ならこう答えるのだろうか。

「自主規制しようとするのは誰のためなんだい。純文学だけでなく、エンタメ的な小説も多くある。どの部分を面白いと感じるかは読者によつて違う。作者には予想できないことさ。迷いがあつても、最後まで書ききつてしまふことだよ」

「この冒頭の習作みたいなものしか書けないんだ。援助交際は、言葉を換えただけの売春の一形態だよ。日本の現状は国連の人権委員会から問題視されているらしい。昔の赤線のように国が管理するものではなく、暴力団の資金源になるものでもない。管理売春ではなく、個々の男女が直接交渉を行う。媒介する組織がないのは幸いだが、素人が簡単に性を切り売りすること自体に制度的な問題があるらしい。合理的だが、その実情は理解されにくい。主に男が性欲を満たすために対価を支払い、若い女子はリスクを負いながらも肉体を許す。だが、金銭で形をつければ必ず代償が伴う。男は口説きのプロセスを省略し、女は安易に肉体を提供することで物的充足を得られるかもしれない。だが、その安易さから新たなる欲求が生まれ、欲望の無間地獄に陥ることになるのだ」

「そんな背景説明を長々と書く必要はないさ。それこそ削除すべきだろう。書いてしまつたものは仕方ないけど……。まだ続けるつもりか？」

「いや、やめておくよ。R君が同人誌から抜けた分のページをカバーしようと思つたんだ。コピペだつてせざるを得なかつた」

「そうか……。迷惑をかけているな」

「長々としたついでに、もう少しだけ。そもそも僕と

R君の共通点として、“老いらくの恋”なんてほとんど存在しないよね。高齢の男が性欲を満たすために手間や時間をかけるだろうか？ 大多数は金品に頼るしかない。労力を使わずに手つとり早く肉欲を満たすには、割り切った関係の方が早いんだ。R君は男女関係というより、人間同士の関わりに興味を持とうとしていた。僕にも、その傾向が少しあつた。相手によつては深入りすることもある。R君は妻子があつたから深入りできなかつたが、僕は相手の気を引こうとしたり、逆に理解しようと努めたりした。それは快樂を高めようとする付加的な営みだつたのかもしれない。味氣ない即物的な性行為より、精神的なつながりを求めてしまつ。単なる性器の接触ではなく、より相手を知り、共通の価値観を持ちたい。人間同士の共感を伴うことで、より深い快樂を得たい——そういう、利己的快樂主義の正当化かもしれないんだ。

こうして冷めた自己分析をしてしまうから、これ以上は書き続けられないのかもしれない」

「それなら、やめたら？」

「そうするよ。——ああ、そうだ。この前あつたことを話さなければならなかつたんだ」

「やつと話の展開が変わってきたな」

「僕はこの前、不思議な体験をしたんだ。人の体験談はいくらでも聞いてきたけど、結局は他人事だと思っていた。けれどその時は違つた。自分が自分でないような感覺に陥つたんだ。金縛りとも違う。どちらかと言えば、身体を乗つ取られたような感覺に近かつた。

両親との死別以降、何かに導かれるような行動をとることが度々あつた。日常の偶然と言つてしまえばそれまでだけど、もしかすると意味のある出来事なのかもしれない。世の中で起ることは、すべて必然の連鎖なのかもしれないんだ。

これまで超常現象なんて信じていなかつた僕だけど、実はただ見過ごしていただけだつたのかもしれない。過ぎ去つた出来事は理屈をつけねば説明できると思つていたけれど、振り返れば偶然の連続、そして理屈では片づけられないことも多かつた。若い頃は突飛な出来事も気に留めなかつたが、年齢を重ねて人生を見つめ直すようになつてからは、不思議な縁や現象に心を留めるようになつた。少し感傷的になつてゐるだけかもしれないけどね。

こうしたことを探して人に話しても信じてもらえないだろう。だから頭の中の虚構にしておくことにした。最初

から小説の題材として扱えば、信憑性を問われることもない。だから、これから先も妄想の産物として書き残すことにするよ。R君との会話を続けながらね」

「俺は、死んでからしばらく経つているんだろ?」

「ああ、そうだよ。R君が亡くなつて、もうすぐ三ヶ月になる。……いや、正確にはこの文章を書き始めてから三ヶ月だ。本当は五月の末から書き始めていたから、君が亡くなつて一ヶ月くらいの頃だつたんだ。途中で書けなくなつて、放つてしまつたんだよ」

「なぜだ?」

「同時に別の原稿も書いていてね。そつちが行き詰まつたから、結局こちらに戻つてきたんだ。締め切りが近づいて焦つていたから、書きやすい方に戻らざるを得なかつた」

「そうか……もうそんなに経つのか。前々回の七号が出た頃、同人誌の仲間に病気を公表していいかと聞かれた。俺は“病気をネタにしてもいい”なんて強がつて見せたけど、あれは治るつもりでいたからなんだ」「その気持ちは伝わつてきていたよ」

「当初は死ぬ覚悟すらなかつた。気づけば現世のしがらみも、未練も欲も、全部手放していた。今は冥土の側から現世を見ている。葬式までは魂が浮遊していた

が、それも流れ作業のように冥土へと導かれた。

ただな、条件が揃えば冥土と現世が繋がることがある。どういう理屈なのかはわからないが、こうして会話できるのもその一つなんだ。実は死ぬ直前から、そうした現象が始まつていた。死の瞬間から冥土へ行くまでの過程をすべて見られたんだよ。もし生き返つていたら、その体験を作品に活かせただろうに……。それはもう叶わない。

だが不思議と残念な気持ちは消えていた。その代わり、こうして繋がれる時は現世に言葉を残したくなる。説教じみているかもしれないが、現世と交信できなければ、人は励みを持てないらしい。死んでから気づいたが、現世での行いによつても特典があるようだ。徳を積んだ者はもちろん、未練を残した者も何らかの形で優遇される。けれど、そうした条件に当てはまらないくとも、現世の人の想いが強ければ、時折こうして繋がれる。どうやらそれが鍵らしい」

「魂が浮遊して時間も空間も越えられるなんて、本当にそんなことができたの?」

「できたんだ。四次元的に移動して、現世や過去を自由に行き来できた。見えたのは断片だつたが、人生を納得できるほどのものだつた。死の瞬間は現世ではほ

んの一瞬かもしれないが、意識の中では時間が止まる。

彷徨い、学び、納得するまで過ごせるんだ。死ぬ前の一秒が、感覚的には数日になることもある。先人たちが語ってきたことは、嘘ではなかつた

「じやあ、死ぬことに納得できたんだね？」

「納得せざるを得ない。死は誰にとつても平等で、自然に受け入れられるようにできている。未練も欲も消えるが、必要ならこうして現世に顔を出すこともできる。おまえも体験したはずだろ？ そのことを証明するためには、俺はこの文章に現れたんだ。読者の意識の中にも登場できる。おまえの文章を借りて、それを示そうとしている」

「いや、やっぱりよくわからないよ」

「死を納得するための別の仕組みを選んだんだ。あの時は未練があつて、全てを知る学習よりも、最後にやり残したことを選んだ。だから最後の行為を行つた。

……おまえも体験しただろ？ あれが関係している。わずかな時間だったが、自分の意思で決めたんだ」

「そうか、やっぱりそうだったんだな。あの時、君が僕に乗り移つたんだ。ずっとそう感じていたけど、今確信できた。それで僕は、この状況を書かざるを得なかつたんだね」

「悪かつたな」

「いや、むしろ偶然が重なつて面白い出来事になつた。小説にするにはちょうどいい題材かもしれない」

「いいぞ、どんどん書け。ヒーロー扱いは要らない。俺の生きざまと整合性がとれていればそれでいい」

「嘘みたいなことが実際に起こつたよ。物語の常識を逆さまにしたような出来事だつた。『嘘を本当のように、本当を嘘のよう書く』のが小説の極意だろ？ その出来事の翌日、君が亡くなつたことを知らされた。偶然にしては出来過ぎだ」

「おまえが何を体験したか知つていて。おまえは性行為が上手くいかないことが多かつただろ？ あの日は違つた。自分ではないほどスムーズにできたんじやないか？」

「その通りだ……。あれは君が乗り移つたせいだつたのか？」

「そうだ。死んだ後も葬式までは現世に留まつていたからな。その間に最後の望みを果たした。人はそれぞれの生き方によつて、死の直前に選ぶ最後の行為が違うんだ。俺は俺らしいやり方を選んだ。その時に、おまえの身体を借りたんだ」

「なるほど……。やっぱりそうだつたんだ。確かにあ

の日はいつもと違っていた。なぜか不思議と身体が応えてくれたんだ。ED治療薬の助けを借りても効果が

薄れていたのに、その時はまるで別人のように元気だった。納得したよ。どうも、いつもと体調が違つていた。あれほど元気なことはなかつた。あれは……君が僕に宿つたからなんだ」

と、ここまで書いて振り返る。唯一と言える友人が亡くなつたのは事実だ。公私を問わず何でも話せる存在で、お互いに下世話な話も多かつた。だが体質の違いから、嗜好的傾向に差があり、それもまた興味深かつた。肉体的な行為は非日常として関心の対象となり得たのだ。とはいえ、僕自身は刹那的な快楽追求にとどまつていた。

R君は精力の化身のようだつた。女なら誰でもよいというわけではなく、相手に関わらず平等に温かく接した。男女の区別を超えて人を見つめる姿勢は、彼の文章にも現れていた。一日で何十ページも書き上げるその執筆力は、精力と同じほどのパワーを持つていた。彼はこうも告白していた。性交の究極は「自らが男根になること」だと。頭の禿げた部分を亀頭になぞらえ、存在そのものを象徴化して語る。まるで自身を男根そ

のものと同一視するかのようだつた。

「これを公開するつもりか？」

「まだ、このままじや公開できないよ。R君がいいと言ふなら考えてみてもいいけど」

「どうせ同人誌だろ。Fだつていつも言つてるじやないか。同人誌だからこそ、何を書いてもいいんだってさ」

「それは言つても、生きてきた証として形に残るんだ。紙に刷られてしまえば後世まで残るかも知れない。もしかしたら何十年後に掘り起こされるかもしれない。だから、安易なものは残せないんだ」

「おまえが大罪でも犯したなら、マスコミが同人誌を引っ張り出すかもしれないが……いや、ならないな。冗談だよ。俺はおまえを励ましたり助言したりするために出てきたんだ。そんなことばかり気にしているから、前に進めないんだぞ」

「R君が亡くなつて、もう時間が経つた。病氣で入院していることも仲間に知らせていいつて言つていたし、自分のことを小説の題材にしてもいいとも言つていた。けれど、無理して書いたら、こんなくだらない文章になつてしまつた。笑つてくれるのかもわからない。こ

んなことを書けるのは今だけかもしれないし、ネタに  
も賞味期限があると思って許してもらいたい。

感謝を伝えようにも、もう君はいない。弔いの方法  
なんて人それぞれだけど、供養のエッセイなんて君は  
嫌うだろう。だから、君ならどんな文章を喜ぶかを想  
像してみた。及第点をくれて『まあ、いいだろう』と  
笑つてほしいんだ。R君が亡くなつても、お告げのよ  
うなものはなかつた。夢の中にも出てこなかつた。現  
実は味気ないものだ。ただ、もっとR君の書いた小説

を読みたかつた。作中の登場人物を見る目は温かい。  
しかも、パワフルな創作力には到底敵わなかつた。だ  
から、満足してもらえるのか、わからないでいる」

「そんな自信のないことはどうするんだ？ 今の俺に

は物も金も要らない。承認欲求だつてなくなつていて。  
生きていた元気な頃の俺は、書き過ぎてしまふことが  
多かつた。自分の楽しみのためだけでも書けた。それ  
ゆえに自己満足に至ることも多かつた。だけど、根本  
では読者に喜んでもらいたい一心で書いていたんだ。  
俺のことを文章に入れて、最後の最も気持ちいい经济体  
験だった、という風に書いてくれたので良かつた。

おまえは自分のことを物書きだと自覚していないよ  
うだけど、周りはおまえのことをそうは見ていない。

何々賞とか目に見える評価はないけれど、今までアマ  
チュアながら長いこと書いてきたのだし、結果がどう  
あれ、ずっと鍛錬をしてきた。だから、こうやつて俺  
を登場させたのじやないか。ふしだらなものを見表す  
きる口実にもできる。できるのは今しかないだろ  
う？」

「どうせR君の願いは想像できる。女ともっと交わり  
たいんだよね。なんせ、長い付き合いなのでだいたい  
わかる」

「わかっているじゃないか」

「だけど、そんなポルノチックなのは書かなくなつ  
た」

「どうして？」

「最近は同人誌の代表として公的な場所にも出ること  
があるんだ。そんな場所に出るに従つて自主規制しが  
ちだ。最近は老若男女、広範囲の読者を意識してしま  
つている。自制しているからね」

「まあ、いいじやないか。俺の供養だと言つたじやな  
いか。続きを書いてくれよ」

「できないよ。文才があればアカデミックに紛らして  
書けるけど、そんな素養はないからさ。もう時間もな  
いし、良し悪しなんか言つてられない。締め切りもあ

ることだし、仕方ないよ。ここいらで止めて日常的なものに移行することにする。信じてくれないような話だけど、こんなこと也有った」

「どれどれ」

「その日が、R君と母の命日が重なったことだよ。母が亡くなったのも四月二十四日だった。両親の葬式は短期間で続き、父と母が共に亡くなつて一年も経たないうちに、僕の頭の中では命日を混同してしまつていた。父が亡くなったのは八月二十日。なのに、父の命日の二十日と母の命日の二十四日を一時的に取り違えてしまい、父母の命日が入れ替わつて記憶されていたんだ」

「四月二十四日とは、俺の死んだ日じやないか」

「しばらく経つて冷静に思い返したら、母の命日が確かに二十四日だったことに気づいた。R君の命日と母の命日が重なったのは、単なる偶然にすぎない。『だから、それがどうした』と言わればそれまでだ。ただ、もしあの日が父の命日だったとしたら、男性の立場なら『そんなこともあり得るかもしねー』と好色な想像を膨らませただろうし、女性の立場なら『母親の亡くなつた日に何てことをしているの。不謹慎でいやらしい』という印象になつたと思う」

「それにしても偶然が重なつたものだな。フィクションなら嘘っぽいと思われるほどだ」

「確かにそうだね。でも、これも本当のことだつたんだ。僕にR君が乗り移つたという設定にすれば、小説の中の話として受け入れてもらえるだろう」

「まあな。本当のことでも、嘘のように書けば信じてもらえないことになる」

「それはそうなんだけど……。母の葬儀のときの喪主挨拶では涙声になつた。でも父の葬儀のときの挨拶は淡々としていた。不思議なものだよ。母はやつぱり特別だつたんだ。そんな日に君が死ななくてよかつたのに。せめて父の命日の八月まで生きていてくれたら、もう一作書けたかもしれないのに」

「過ぎたことはどうしようもない。これからはおまえに託すしかない」

「そうだね。この号の発行ではページ数が少なくなるのを心配して、ここまでが苦し紛れの策だつたんだ」「なぜだ?」

「ページ数を増やすために会話形式にしてスカスカにしたり、チャットGTPとのやり取りをコピペしたりしたんだ。姑息な手段だけどね」

「そういえば、生前は同人誌の負担金が少なくて助か

つた。俺みたいな貧乏人でも、五千円で作品を載せら

れるときもあつた」

「そうだね。パソコンや電子機器が発達して、今では紙でも電子でも作品を発表できる時代になつた。素人

でも同人誌を出せるようになつたのは大きい」

「パソコンに強い編集長のおかげだな」

「ただ、同人誌発行で相談できる相手がいなくなつたのは困りものだ。校正も自前だし、手伝ってくれたR君もいない。さらに掲載枚数の問題もある」

「どういうことだ？」

「個人負担金を四百字詰め三十枚まで五千円と決めている。今回の目標は五十枚くらいだから、二万字まで一万円でいい計算になる」

「それが？」

「だから、なんとか五十枚あたりまで増やすために会話形式を多用したんだ。スカスカにして二万字くらいにしたかった。そうすれば、他の同人の負担も今まで通り変わらない。参加者も高齢化して減ってきてるし、せめて書きたい人には百枚越えでも負担が軽くなるようにしたいんだ」

「なるほどな。だが文字を大きくしたりする方法もあつたろう？ まあ、それでも努力には敬服するよ。あ

の世からでも応援したくなる」

「さつきの生成A Iとの会話はどうだつた？」

「またA Iか、って感じだな。同じことばかりだとマネリと言われるぞ」

「そうだと思った。でも実際にA Iとやり取りして、画面の文章をコピーしてみたんだ。小説には定義がないから、どんな形式でも成立すると思つた。A Iの出力でもページ数は稼げるし、内容によっては教養小説にもなるかもしれない」

「でも安直だな。おまえが言つてた別の同人誌の代表も、ネットの資料をコピーして書いていたろ？ それと似たようなもんだ。俺はあの世から見ている。樂をするな。まだ人間にしか書けないものがあるはずだ」「でもね、今回は時間がなかつた。許してほしいよ。でもこうやつて会話していると、君が本当に目の前にいるように思えるんだ」

「いや、作品としてはこのままじや駄目だ。延々と会話だけが続いている。括弧内の文章がだらだら長いんだ。もつと状況描写がないと物語に入り込めない」「どうすればいいか、アドバイスしてくれない？」

「だから成長しないんだよ」

「そもそも、R君を書いているのは僕なんだけど……」

まあいいか。君が登場する理由をどう描けばいい?」

「こじつけで十分だ。学術論文じゃない。読者は文字を目にした時点で、現実から物語へ気持ちを切り替える。あとは誘導すればいい。ところが、おまえは状況描写が乏しく、理屈ばかり。そこが欠点だ」  
「僕は嘘をつくのが苦手でね……。でも、要は自分が納得できる形ならいいのか。じゃあ、こういうのはどうかな」

「どんな案だ?」

「ダークマターって知ってる? 暗黒物質とも言う。

宇宙は一三八億年前に誕生して、今も膨張を続けている。でも計算上はもつと広がっているはずなのに、実際は遅い。その差を説明するために、目に見えない質量=ダークマターが存在するって考えられているんだ

「……で、それが?」

「つまり、あの世をダークマターの世界にたどえるんだ。見えないけれど確かにある場所として」  
「大げさだけど、嘘もここまで来ると潔いな」

「先祖の靈はお盆だけじゃなく、普段も思い出すたび

に近くにいる。脳内でイメージすることが、ある種の“同期”になるんだ。僧侶も言うだろ、『故人を偲ぶこ

とが最高の供養だ』って」

「イメージするだけでいいなんて、本気で言つてるのか?」

「そう。イメージが脳波を生み、その波動が見えない世界と重なる。量子もつれのように、こちらの意識と向こうが連動する。だから交信が可能になる。『冥土』の辞書的意味は『死者が行く暗黒の世界』だろう?」「もう難しい理屈はいい。読者が物語に入るには、ちよつとしたきつかけがあれば十分だ。完全な設定より、面白い展開の方が大事だ」

「そうか……。何とか良い方向に持つていきたかったけど、ページ数も足りたし、締め切りも迫つていて。ここで終わりにするしかないかな」

「残念だな。また俺を登場させてくれ。他の同人にも伝えてくれよ」

「ありがとう、R君。出てきてくれて」

「ああ、こつちも礼を言うよ。役に立つたかはわからないうが……『もう、いいだろう』ってことにしておくか」

「ここで、冒頭からのページを振り返つてみる。  
友だちが亡くなつた。「死」とは何だろ。単なる象

徵にすぎないのか。人間が死について考えるのは、象徴化の営みに過ぎないのだろうか。

過ぎ去った過去を思い出すことも、死を想うこととも、突き詰めればマネーやポイントのような「象徴」にすぎないのだろうか。

あの日、「象徴」でしかないはずの仮想のポイント利用で異性と交わることができた。数字に過ぎないはずの仮想のポイントが、現実の快樂へと変わったのだ。

同じく、仮想のポイントに似た「死」という出来事が、この実体を持った身体を幻視のようにすり抜けていった。

## 合評会案内

一、  
日時

二〇一五年十一月一日（日）

二、  
場所

午後二時二十分  
富山県民会館 六〇八号室

富山市新総曲輪四番一八号  
Tel (076) 432-3111

読者方々のご出席を歓迎します。

## あとがき

会の縮図のような場所だった。

(内角)

★飯田氏が亡くなった後でしたが、無事九号を発行することができました。今回は寺本さんの作品が大作で、整理が間に合わなく、掲載見送りとなりました。その分、池田さんの作品がページ数でカバーする形になり、前号と同じ冊子の厚さとなりました。めでたし、めでたしです。加えて、締切を厳守した同人全員の頑張りの賜物です。いよいよ次回「繫」は節目となる一〇号となります。記念すべき号になるよう同人一同頑張りましよう。

(村井)

(藤野)

★涙なんてタイトルにするもんじゃない、と人生相談で伊集院静さんが語っていた覚えがある。変えようとしたがあきらめた。「涙いくつ」は、四年前初めて小説に取り組んだ際のタイトルである。元原稿は十項目で構成され原稿三十枚以上あるが、すでに短編で引用した部分は削除し、四項目のみの小作品となつた。ビジネスも同じであるが、結局新しい作品を生み出せないまま、言い訳ばかりのあとがきになつた。

★今よりずっと若い頃、会社勤めをしていたことがあります。私が勤めていたのは営業会社で、てっきり全社挙げて「エイエイオー」で同じ思いを抱いているものと思つていたが、摩訶不思議なもので、売り上げ躍進を

両手を挙げて喜ぶ主流派がいれば、快く思わない非主流派がいたりした。また、保守派がいれば、革新派がいて、過激派などもいたりした。どこにも属さず、とりあえずは様子伺いの日和見主義の者もいた。彼らはどこか勢力のある派閥につくことになる。まるで、社

書く

時間ができたので、かつて途中でやめてしまつた物語の続きを書こうと思い、取りかかつた。

だいぶ以前同人雑誌『櫻坂』に連載していた『伝蔵異聞』を書き直し、手を入れて、完成させようとした。しかしこれまた中途になつてしまつた。もしかすると、また中途で終わってしまうかも知れない。続きを読みたい読者(いるかいないわからないが...)に対して申し

訳ないので、これから頑張つて勉強して、なんとか最後まで書いてみたいと思います。

怪奇小説とか、怪談が好きなので、自分でも書きたいと思っている。

同人雑誌向けではないかも知れないけれど…。

(池田)

池田 良治

金沢市辰巳町

寺本 親平

金沢市弥勒町

内角 秀人

富山市中市

中井方

深井 了

高岡市扇町

関口方

藤野 繁

富山市婦中町

むらい はくどう

富山市馬瀬口 村井方

執筆同人 (五十音順)

# 新同人を募集しています

当誌は創作を中心として掲載します。

新同人として参加をご希望の方は、

編集発行人までご連絡ください。

# 編集ボランティアを募集しています

編集・レイアウト・製本までのノーカットを伝授します。

興味のある方は編集発行人までご連絡ください。

## 繫 第九号

発行日 一〇一五年 一〇月一〇日

編集発行人 村井博道

連絡所 〒930-1301

富山市馬瀬口二二〇 村井方  
TEL 076-483-0402

ホームページ・アドレス

tunagu012.stars.ne.jp

印刷所 やよ古都製本工房